

最新女子國文 卷八

4b
810
昭3

42253

教科書文庫

4

810

42-1928

20000

71949

Kodak Gray Scale

C Y M

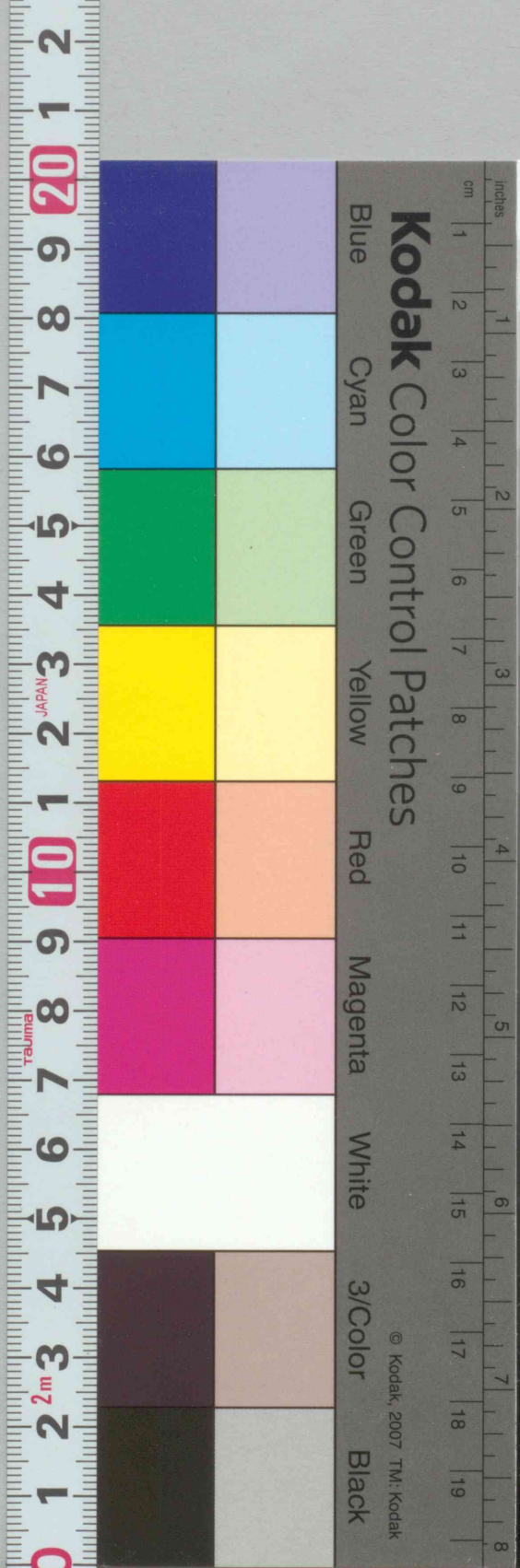
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black





資料室

日三十月一年三和昭  
濟定檢省部文  
用科語國校學女等高

最新女子國文

文學博士松村武雄編



46  
810  
昭3





保津川岸の紅葉

本書は國語及び國文學の本質に顧み、其の編纂法に於て舊套以上に一段の進出を試み、更に各卷並に通卷の綜合的體系と意趣とを重視し、國語教授上最新の用書たるに堪へしめんことを期したるもの、編者はこれが適當なる運用に依りて本科の目的の完全に達成せられんことを切望す。



最新女子國文

卷八

目次

一	朝なり(詩)	蒲原有明	一
二	いさよふ月	阿佛尼	三
三	板倉勝重の妻	新井白石	八
四	新島守	〔増鏡〕	三
五	白鳥の悲(詩)	千家元麿	三
六	芳宜園大人を祭る詞	村田春海	四
七	紅葉	鳥野幸次	六
八	菅公の配流	〔大鏡〕	三
九	俳句選		完
一〇	良澤とゲーテ	笠原道夫	四



一一	遊戲主義	杉村楚人冠	四
一二	敦盛最期の事	〔平家物語〕	五
一三	忠度の都落	〔源平盛衰記〕	五
一四	歳晩の名家	横山健堂	六
一五	近世短歌選		六
一六	鉢木	〔寶生流謠〕	七
一七	狐塚	〔續狂言記〕	七
一八	萬里長城(詩)	土井晚翠	八
一九	長良堤の訣別	坪内逍遙	二〇
二〇	信長の家庭と光秀の家庭	福本日南	二六
二一	妹に諭す	吉田松陰	二四
二二	無憂華	九條武子	二三
二三	光あれ	姉崎正治	二四〇

二四	世界の四聖	高山樗牛	四
----	-------	------	---

自修文

一	出家と其の弟子	倉田百三	一五
二	生命の冠	山本有三	一七五



最新女子國文

卷八 目次 終

最新女子國文 卷八

蒲原有明  
詩人。名は雄。  
明治九年  
東京市生。

一朝なり

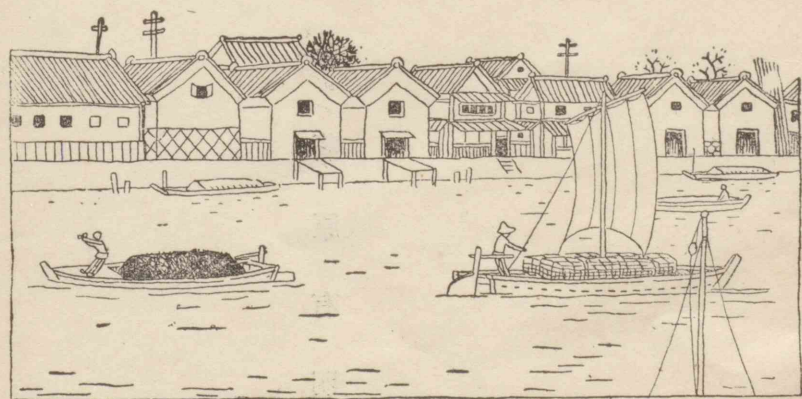
朝なり、——やがて濁川  
ぬるくにほへど、夜の胞を  
たゆらに運ぶおぼめきに、  
なほも市場の並み藏の  
壁にまつはる川の靄。

蒲  
原  
有  
明

朝なり、——やがて、ほのじろく



水面に映る壁のかけ  
 明りぬ、くらきみなぞこも、  
 大川づたひ、さす潮の  
 ちから逆押すに、ごりみづ。  
 に、ごれど水は、くちばみの  
 あやにうごめき、緑ねり  
 瑠璃の端ひかり碧よどみ、  
 揚場の杭にまつはりて、  
 いろめきたちぬ、やうくくに。  
 青もの車、いくつ——はた、  
 かせぎ人ら——ものごひの



空手、——荷足のおもき脚、  
 艫こしに竿押し、舵かじとりて、  
 舳しほに歌を曳く船をとこ。

朝なり、——影は色めきて、  
 かくて日もさせに、ごり川、  
 朝なり、——なべて、かゝやきぬ、  
 市場の河岸の並み藏の  
 そのしら壁も、——わが胸も。〔有明詩集〕

二 いさよふ月

むかし、壁の中より求めいでたりけむふみの名をば、今の世の人の  
 子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡

阿佛尼  
 歌人。藤原爲  
 家の後妻。弘  
 安六年歿、年  
 不詳。



ふみの名  
孝經。  
みつぐきの岡  
みづぐきの岡  
のくづ葉を吹  
きかへしおも  
知る見らが見  
えぬころか  
も。(古歌)  
神樂の詞  
あはれあな  
おもしろ、あな  
たのもし、あ  
なさやけ、お  
け。

世を治め  
紀貫之の古今  
集の序にある。  
二たび勅を  
藤原定家新古  
今集と新勅撰  
集とを撰し、  
其の子爲家も  
亦續後撰集と  
續古今集とを  
撰した。

三人のをのこ  
子

の葛葉かへすくも書置くあとたしかなれども、かひなきものは親  
のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬまつりごとにも漏れ、忠  
臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなり  
けりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、なほこのうれへこそや  
る方なく悲しけれ。

さらに思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだ  
なるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひ  
られし時、よもの神だちの神樂の詞をはじめて、世を治め物をやはら  
ぐるなかだちとなりけるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれ  
たりける。

さても又集をえらぶ人はためし多かれど、二たび勅を受けて、世々  
にきこえあげたるは、たぐひなほあり難くやありけむ。そのあとに  
しもたづさはりて、三たりののをのこ子ども、ちの歌のふる反古ど

俊成「定家」  
爲家「爲氏」  
爲教  
爲顯「此の三  
爲相」人阿佛  
爲守「尼の出  
細川」  
播磨國美瀨郡  
細川庄。  
子を思ふ  
人の親の心は  
闇にあらねど  
も子を思ふ道  
に惑ひぬるか  
な。(平兼輔)  
あづま  
鎌倉幕府。



尼 佛 阿

もを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたす  
けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。」とて、深き契をむすび置かれし細  
川のながれも、ゆるなくせきとゞめられしかば、あととふ法のともし  
火も、處をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共にきえをあらそふ  
年月を経て、あやふく心ぼそきものから、何  
としてつれなく今日まではながららむ  
惜しからぬ身ひとつはやすく思ひすつれ  
ども、子を思ふ心の闇はなほ忍びがたく、道  
をかへりみるうらみはやらむ方なく、さて  
もなほあづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ  
影もやあらはるゝと、せめて思ひ餘りて、よろづのはかりを忘れ、身  
をえうなきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ  
いでなむとぞ思ひなりぬる。



み冬立つはじめ

建治三年十月、北條時宗の執權時代。

人やりならぬ人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ。

(源實)

侍従

爲相。冷泉家の祖。當時十五歳。

大夫

爲守。後出家して曉月と云ふ。當時十三歳。

ころはみ冬立つはじめの、さだめなき空なれば、ふりみふらずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ涙とともにみだれ散りつゝ、事にふれて心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとてもとゞまるべきにもあらで、なにとなくいそぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖の雫もなぐさめかねたる中にも、侍従、大夫などのあながちにうち屈したるさま、いと心苦しければ、さま／＼いひこしらへぬ。

代々に書置かれける歌の草紙どもの奥書などして、あだならぬかぎりを取りしたゝめて、侍従のかたへ送るとて、書添へたる歌、

和歌の浦にかぎとゞめたる藻鹽草

これを昔の形見とも見よ

あなかしこ横浪かくな濱千鳥

一方ならぬあとを思はば

これを見て、侍従のかへりごといと疾くあり。

つひによも仇にはならじ藻鹽草

かたみをみよの跡にのこせば

迷はまし教へざりせば濱千鳥

一方ならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて又うちしをれぬ。大夫の、傍去らず馴れ來つるを振捨てられなむ名残、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はる／＼とゆくさき遠く慕はれて

いかにそなたのそらを眺めむ

と書きつけたるものよりことにあはれにて、同じ紙に書添へつ。



つくづくと空な眺めそこひしくば

道とほくともはやかへりこむ

とぞ慰むる。 十六夜日記

新井白石  
元祿時代の學者、政治家。  
名は君美。享保十年歿、年六十九。  
駿河の國府、當時の駿府、即ち今の静岡。

### 三 板倉勝重の妻

新井白石

天正十六年徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひ、板倉勝重をば此所の町奉行に任ぜられぬ。初め勝重を召され、此の職の事仰せ下されしが、其の任に堪へざるよしを固く辭し申しけれども、更に御許なく、勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ御返事をば申すべけれ。」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありません、罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべき事ありとて、告知らする人あり。如何なる幸か候。」といひけるに、勝重物をも言はず、ほくそゑ

みて、衣裳ぬぎ棄て座になほり、妻に打向ひ、「されば今日召されし事、餘の儀にあらず。此の度御座所を移さるゝに依りて、彼の町の奉行たるべき由を仰せ下さる。如何にも叶ふべからざる旨を辭し申せども、御許なし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことは如何に思ふ。」といふ。



新井白石

妻は大いに驚きて、「あなあさまし。わたくしごとなどならば、夫婦はかるといふ事もこそあれ。公にてかゝる事やのたまふべき。まして是は仰せ下さるゝ所なり。殊に其の職に堪ふ堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候べき。」といへば、勝重いやく、我この職に堪ふ堪へじは我が心一つのみにあらず、御身の心による事にて侍るぞ。先づ心を鎮めてよく聞き給へ。古より今に



至り、異國にも、本朝にも、奉行頭人などといはるゝ者の、其の身を失ひ、其の家を亡さぬは稀なり。或は内縁に就きて、訴を斷る事おほやけならず。或は賄賂に因りて、理を判つ事わたくし多し。是等の災は婦人より起る所なり。我若し此の職承らん後は、親しき人の言寄らん事なりとも、訴訟の事執り給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候事ありとも、苞苴のもの受け給ふまじきか。是等の事を初として、おことは勝重の身の上、如何なる不思議の事ありとも、さし出でてものたまふまじきよし、固く誓ひ給はざらん

石井白筆  
畫堂前神也、於論初、予博人  
不惜去重一、予太、予精誠貫  
日、紅彩、白老、漢、以、德、志、行、表、信  
席、留、讓、肉、予、廉、於、初、於、後、四、光  
死、而、何、有、持、言、得、逢、予、甚、幸、以  
函、中、有、十、三、殺、人、志、其、日、傳、信  
先、許、於、地、解、秦、王、以、命、查、使、予  
素、所、未、遂、成、功、為、城、守、於、急、不  
才、晚、報、風、高、予、亦、幸、人、不  
願、半、聲、心、 若、小、利、石、井、白、筆

新井白石筆蹟

め

には、勝重此の職に任ずる事は、如何にも叶ふべからず。さればこそ御身と謀るべしとは申したれ。といふ。妻つくくうち聞きて、誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ。みづからは如何なる誓をも立てなん。とく参りて、畏らせ給へ。といふ。勝重大いに悦びて、神にかけ、佛にかけて、堅き誓たてさせて、此の上は思ひ置くことなし。さらば参らん。とて、衣裳ひきつくろうて出づ。袴の後腰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、袴のうしろ悪しく候。というて、立寄りて直さんとす。勝重聞きもあへず。さればこそ我が妻に謀らんと申せしは過たざりけれ。勝重が身の上の事、如何なる不思議ありとも、差出でて物いはじと誓ひしは今の程ぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職承る事、叶ふべからず。とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠状まゐらす。さらばその言葉、いつまでも忘れ給ふな。といひて、御前に参る。徳



川殿如何に、汝が妻は何といひし。」と仰せければ、妻にて候ものが、慎みて承れと申し侍る。」と申す。「さこそはあらめ。」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。〔潘翰譜〕

### 四 新島守

四月二十日帝おりにさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろみなこの御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞきこえさする。このほどは、家實のおとゝ關白にておはしつれど、御讓位の時、道家のおとゝ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおほし構ふること、忍ぶとすれどやうく漏聞えて、東

四月二十日  
承久三年  
帝 順徳天皇  
春宮 仲恭天皇  
御兄の院 土御門院  
父みかど 後鳥羽院  
家實 近衛氏  
道家 藤原良經の子  
あづまの若君 當時の將軍頼經。

水鏡 大鏡 増鏡

さるべくして  
執權北條義時  
の決心。



後鳥羽天皇

さまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつくかれを御勘じのよし仰せらるれば、御方に参りつるつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめてたしとぞ院はおほしめしける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくして身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらすは、思ふとこ



ろ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまの死にをせんことはあるべからず。心をたけく思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄箱根は越ゆべし。」など泣くくいひきかす。まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとははれに心細げなり。かくてうち出でぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時たゞひとり鞭をあげて馳せきたり。父胸うちさわぎて、「いかに。」と問ふに、軍のあるべきやう、大かたのおきてなどは、仰の如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく、鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一ことをたづね申さんとて、ひとり馳せ歸り侍りき。」といふ。義時とばかりうち案じて、かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかゞあらん。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切り、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで、君は都におはしましなから軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

公經の大將  
藤原氏。西園寺家の祖。  
御うまひ  
將軍賴經。賴經は公經の女の出。  
故大將。賴朝。  
賴朝の女(賴朝の女) 賴朝の女(賴朝の女)  
義朝の女(義朝の女) 義朝の女(義朝の女)

都にもおぼしまうけつることなれば、ものゝふども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみなん、御うまごのこともさることにて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり、その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶなかり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門



七條院  
藤原殖子。後  
鳥羽院の御母。  
修明門院  
藤原重子。順  
徳院の御母。

中院  
土御門上皇。

新院  
順徳上皇。

富士川  
駿河國。  
天龍  
天龍川。遠江  
國にある。

大納言忠信尾張中將清經中御門大納言宗家また修明門院の御はら  
からの甲斐宰相中將範茂などつぎ／＼あまたきこゆれどさのみは  
記しがたし。いくさにまじり立つ人々このほかの上達部にも殿上  
人にもあまたありき。

中院はあかて位をすべり給ひしより言にいでてこそ物したまは  
ねど世のいと心やましきまゝにかやうの御さわぎにも殊にまじら  
ひ給はざめり。新院はおなじ御心にてよろづいくさのことなども  
掟ておほせられけり。

いつの年よりも五月雨晴間なくて富士川天龍などえもいはず漲  
りさわぎていかなる龍馬も打ちわたしがたければ攻めのぼる武者  
どももあやしくなやめり。かゝれども遂に都にちかづくよしきこ  
ゆれば君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや宇治勢多へ分  
ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま言の葉もおよばずまねび

がたし。あるはふかき山へ逃げこもり遠き世界に落ちくだりすべ  
てやすげなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらんと君も御心みだれてお  
ぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も誠のきはになりねればい  
と心あわたゞしく色を失ひたるさまどもたのもしげなし。六月十  
日あまりにやいくばくの戦だになくてつひに御方のいくさやぶれ  
ぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて泰時と時房と亂れ入りぬ  
ればいはん方なくあきれて上下たゞ物にぞあたりまどふ。

あづまよりいひおこするまゝにかのふたりの大將軍はからひお  
きてつゝ保元のためしにや院の上都の外に遷したてまつるべしと  
きこゆれば女院宮々所々におぼしまどふことさらなり。本院は隱  
岐國におはしますすべければまづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるに  
て七月六日いらせたまふ。今日を限の御ありき浅ましうあはれな  
り。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御

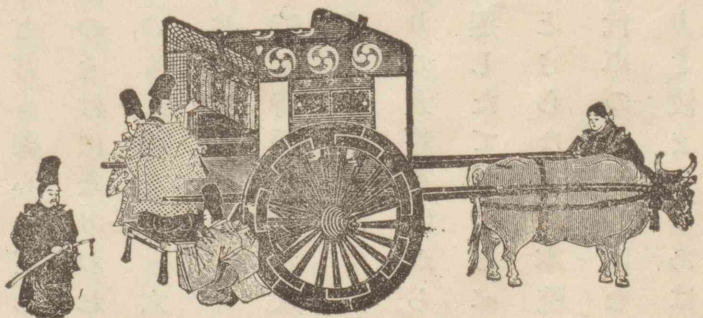
鳥羽殿  
山城國紀伊郡  
鳥羽にあつた  
城南の離宮。  
ものにもがな  
や  
とりかへすも



のにもがなや  
世の中をあり  
しながらのわ  
が身と思はん。  
(源氏物語河海  
抄)  
信實  
藤原氏。

ぐしおろす。御とし四十ぢに一つ二つ  
やあまらせ給ふらん、まだいとをしかる  
べき御ほどなり。信實朝臣召して、御姿  
うつしかゝせらる、七條院にたてまつら  
せ給はんとなり。かくて同じき十三日  
に、御船にたてまつりて、遙かなる波路を  
しのぎおはします御心地、この世におな  
じ御身ともおぼされず。いみじう、いか  
なりける代々の報にかとうらめし。

新院は佐渡國にうつらせ給ふ。上達  
部殿上人、それより下はた残るなく、この  
ことに觸れたるたぐひは、重く軽く罪に  
當るさまいみじげなり。中院は初より



車代網

畑  
土佐國の西南  
部。

しろしめさぬことなれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに  
移らせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらんこといとおそれありと  
おぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の畑といふところ  
に渡らせ給ひぬ。

津の國の  
津の國のこや  
さも人ないふ  
べきに際こそ  
なけれ葦の八  
重葦、和泉式  
部)

本院は六つにて位につき給ひて、十三年おはしましき。おり給ひ  
て後、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじことなりし  
かば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機のまつりご  
とを御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりしそのほど、吹く  
風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれ  
み、近きをなで給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこや  
のひまなきまつりごとをきこしめすにも、難波の葦の亂れざらんこ  
とをおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやうく、枝をつらねて、千代  
に八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春を経ても、空ゆく月日の



かぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありく／＼てよ  
 しなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのがちり／＼  
 にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものどて  
 は、浦に釣するあま小舟、しほやく煙のなびくかたをも、わがふるさと  
 のしるべかとはかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それま  
 てと月日をかぎりたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと  
 心ぼそかるべし。まいていつをはてとかめぐりあふべきかぎりだ  
 になく、雲の浪、煙の浪のいくへとも知らぬ境に世をすぐし給ふべき  
 御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里とほき島の中なり。海づらより  
 はすこしひき入りて、山かげにかたそへて大きやかなるいはほのそ  
 ばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりこと  
 そぎたり。まことに柴のいほりのたゞしばしと、かりそめに見えた

柴のいほり

いづこにも住

まれすばたゞ

住まであらん

柴の庵のしほ

しなる世に。

(西行法師)

水無瀬殿

本院の造らせ

られた殿。攝

津國三島郡島

本村大字廣瀬

にあつた。

二千里の外

三五夜中新月

色、二千里外

故人心。

(和漢朗詠集、

白樂天)

増鏡

後鳥羽天皇か

ら後醍醐天皇

の中興まで十

五代百五十年

間の歴史物語

作者は一條兼

良といふが、

未詳。

千家元磨

詩人。明治二

る御やどりなれど、さるかたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給  
 へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はる／＼と見や  
 らる、海の眺望、二千里の外も残りなき心地する、今さらめきたり。  
 しほ風のいとこちたく吹きくるをきこしめして、

われこそは新島守よおきの海の

あらきなみ風こゝろして吹け

同じ世にまたすみそのはらのえの月や見ん

けふこそよそにおきのしま守 [増鏡]

### 五 白鳥の悲

千家元磨

美しく晴れた日、  
 動物園の雑鳥の大きな金網の中へ  
 園丁が忍び入り、



白鳥の大きな白い玉子を二つ奪つて戸口から出ようとす  
る時、

氣がついた白鳥の母は、細長い首を延ばして、朱色の嘴で園  
丁の黒い靴をねらつてついて行つた。

卑しい園丁は玉子を洋服のポケットに入れてどんく行  
つてしまつた。

白鳥の母は玉子の置いてあつた本の堂へ黙つて引返し、  
それから入口に出て來て立止つて悲しい聲で鳴いた。

二三羽の白鳥がその側へ首を延ばして近寄り、彼女をと  
りまいて慰めた。

白鳥の母は悲しく大きな聲で二つ三つ泣いた、大粒な涙が  
こぼれるやうに。

滑かな純白な張りきつた圓い胸は、

内部から一杯に揺れ動き、

血が溢れ出はしまいかと思はれるほど

動悸を打つて悶えるのが、外からあり／＼見えた。

啼かなくなつてもその胸は痙攣を起して居た。

その悲は深く、その失望は永くつゞいた。

然しやがて白鳥の母は水の中へ躍り込んだ。

さうして涙を洗ふやうに、悲を紛らすやうに、

その純白の胸も首も水の中へひたし、水煙をあげて悶えた。

然しそれはとり亂したやうには見えなかつた。

さうして晴々した日の中で悲を空に飛散した。

その單純な悲は美しく痛切で偉大な感じがした。

その滑かな純白な胸のふくらみの揺れ動くのは實に立派



であつた。

まことにあんな美しいものを見た事はない氣がした。  
威嚴のある感じがした。

金網の周圍には多くの女や吾々が立つて見てゐた。

自分達はひとしく感動した。

自分はその悲を見るのが白鳥にすまない氣がした。

吾々の誤つてゐる事を卑しめられた。

白鳥に知らしてやれないのを悲しく思つた。

自分はその悲を早く忘れてくれるやうに願つた。

〔日本近代名詩集〕

芳宜園

橘千隆。通稱  
加藤又左衛門。  
芳宜園はその  
號。文化五年  
歿、年七十五。

### 六 芳宜園大人を祭る詞

村 田 春 海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人のおく

村田春海

國學者。通稱  
は平四郎。號  
は琴後翁。江  
戸の人。文化  
八年歿、年六  
十六。

縣居

賀茂眞淵。縣  
居はその號。  
明和六年歿、  
年七十三。

つきの御前に菊の初花一枝を手向け、香の木一ひらをたきてうなじ  
つきて申さく。

あはれ悲しきかも。君は我に十といひて、一とせのこのかみにお  
はすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は正に盛の齡におはして、  
我はまだ童にてぞ侍りける。縣居あがたの庭に物學びに行きかひたる時、  
朝に參るとしては君の御はかしのしりへに従ひ、夕にまかるとしては、君  
の御そでのもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらか  
らにも何か異ならん。書よむとては君を師とも尊み、歌作るとては  
我をおとゝえのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君はつかへの  
道に暇なくおはし、我は世のさがにかゝづらひて、自ら疎き方にも過  
ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、我も同じ衢に移り住めば、花  
を尋ぬとては我道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂  
きこともともに憂ひ、嬉しきふしもともに喜びて、世にありふる業の



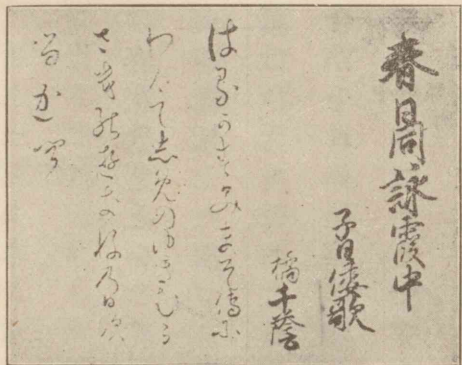
まめごともあるが、かたみに隔なく心をはせること、今にはたとせ、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にか言問はん。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。

くひぜを守り  
宋人有耕田者  
田中有株  
兔走觸株折頭而死  
因釋其耒而守株  
冀復得兔  
兔不可復得而身爲宋國笑  
韓非子

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り行けるを、賀茂の翁世に出て、今をすてて古にかへり、青雲のたかき心しらひを求め、しづはたのあやあるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくと、もがら、彼になづみこゝに引かれて、よくうけひく人なん稀なりしを、君一人心を起して、遍くさとし、廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かになびき來て、古ぶりの歌世に盛になりたるは、まことに君の力によりてなり。その自ら詠みいで給へる歌を見るに、舊きしらべ、新しきすがた、と

者其劍自舟中墜于水。遂刻其舟曰、吾劍是所從墜也。舟止、從其所刻處入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此、不亦惑乎。  
(呂氏春秋)

り、くゝに備はらざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂の御世におよび、後の巧みに習へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは詞に載せざることなんあらざりける。これを見て、高きも短きも愛で尊ばざる人なし。また事好み人は、その名を君に知られては、身のおもて起しと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。



みかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。



あはれ悲しきかも。我がかく言擧するを、泉の下にもさやかにきこしめし、天がけりても遙かに見そなはせとなん申す。

### 七 紅 葉

鳥野幸次

鳥野幸次  
國文學者、學  
習院及び國學  
院大學教授、  
福井縣の人。

春花秋葉といひ、花紅葉といふのは、文學者が年中に於ける景物の美を總括した語である。春、雲と見まがふ花で陽氣にあけた一年の幕は、秋、錦を飾る紅葉で最も美しく閉ぢられる。かくして春秋の鈞合がとれ、終始の照應がつく。花を冒頭にした地の文章は、紅葉の歸結を俟つて始めて完全に組立てられることになる。この見地からする花と紅葉とは共に相對的のもので、各、その間に特殊な美と價値とを認めるのが當然であるのに、詩人はなほ動もすれば紅葉を讚して、これを絶對的の美景に取立てようとする傾向がある。杜牧の「霜葉紅於二月花」といつたのや、天智天皇の御宇春山萬花の艶と秋山

杜牧  
唐の詩人。  
霜葉紅於  
杜牧の詩「山  
行」の中の句。

千葉の彩を競べしめられた時、額田女王の秋山に心を寄せられたのや、乃至は

春はたゞ花こそは散れ野邊ごとに

にしきをはれる秋はまされり

と、詠じたのなどは、いづれもその例で、これは言ふまでもなく、その人その場合の心持に因ることであるけれども、なほ以てこのものの聲價の一斑を知ることができよう。

紅葉といへば今は楓のことであり、専らこれを賞するのが普通であるけれども、これは寧ろ庭園の植樹としての上のことで、試に郊外に出でて遠望せんか、黄變紅變して錯落の美をなせるものは、決して二種や三種の木ではない。即ちこれ等の中には、はじ、漆、まゆみ、つき、銀杏の如きは言ふまでもなく、柿、櫻のやうな樹木もあれば、つた、葛の如き蔓草もある。否々、木といふ木、草といふ草は悉く色づくので、秋



の錦は恐らくこれ等の調和配合したものに附した名であらう。植物學者の言に據れば、氣象の關係も、我が國ほどよく紅葉する樹木の多い地はないさうだ。かくして春花の美を擅に賞することを得た吾人は、また秋葉の彩に飽くことを得、美の國、詩の民として世界に誇ることのできるのである。

萬葉に「もみぢ」の歌は多いが、皆黄葉もしくは黄變と書いてあつて、紅葉・赤葉等の字面を用ひたものは、僅かに一二首に過ぎぬ。然るに平安朝この方悉く紅葉と書くやうになつたのは、恐らく歌人の觀察が極めて狭い部分的のものになつた結果であらう。さて歌人の見るところでは、この色を染出すものは第一に露で、

かりがねの萬葉集。

かりがねの寒き朝けの露ならし  
春日の山をもみだすものはいひ、

あきの露古今集。

あきの露いろ／＼ことに置けばこそ  
とも想像し、第二には時雨で、  
山の木の子のちぐさなるらめ

初時雨後撰集。

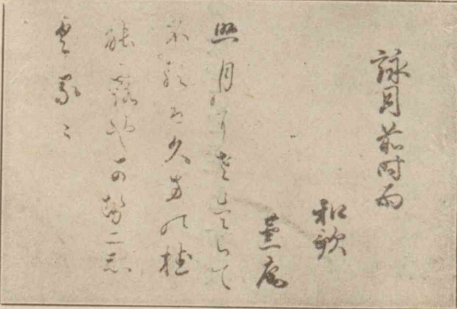
初時雨ふれば山邊ぞ思ほゆる  
いとづれの方かまづもみづらん  
と疑ひ、第三には小澤蘆庵の

小澤蘆庵近世の歌人。京都の人。享和元年歿、年七十九。

ふるさとは園の山柿つたかへて  
染めものこさぬ霜のひと頃  
と賦した霜で、これこそ眞に染紅の因をなすもの、随つて漢詩に白樂天の「寒山十月旦。霜葉一時新。」の如き、これを霜葉といつてゐるのは、よく事實にかなつた名である。

白樂天唐の詩人。白居易。

紅葉の美を錦にたとへるのは古來の慣例で、



小澤蘆庵筆蹟



このたびは  
菅原道眞の歌。  
古今集。

このたびは幣もとりあへず手向山  
紅葉のにしき神のまに〜

と詠み、更に、

もみぢ葉を  
井上文雄の歌。

もみぢ葉を誰も錦にたとふれど

人のしわざは限りありけり

といつて、錦以上との主張をしたのさへある。

景としては水に映じ、霧にかくろひ、夕日に照るなどを主とすべき

で、蘆庵の

もみぢ葉のちしほの上のひとしほを

染むるは松の緑なりけり

と詠じた「松間紅葉」の美も、また見逃すことのできぬものである。さ

てまた蓼太の

晝たゝく門のあたりやちり紅葉

蓼太  
大島氏。信濃  
の人。天明七  
年歿。

ちはやぶる  
在原業平の歌。

といつた「散紅葉」もまた美しいもので、これが水に入つては、

ちはやぶる神代も聞かず龍田川

からくれなゐに水くゝるとは

と怪しまれ、錦を洗ふとか、紅ふかき波が立つなどとも誇張せられ、風

にさそはれては、

ふく風の色の千種に見えつるは

秋の木の葉の散ればなりけり

の如き景をもつくるのである。「四季の趣味

### 八 菅公の配流

右大臣才も世にすぐれめてたくおはしまし、御心おきても殊の外  
にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣り給へ  
るにより、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安から

右大臣  
菅原道眞。  
左大臣  
藤原時平。

ふく風の  
古今集。



昌泰四年  
昌泰は醍醐天皇の年號。此の年延喜と改元。

ず思したる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。この大臣の子どもあまたおはせしに、女君達は婿どりし、男君達は皆ほどくにつけて、位どもおはせしを、それも皆かたぐに流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほやけも許さしめ給ひしかば、共にあて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しくおぼして、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせようめの花

あるじなしとて春を忘るな

また亭子のみかどにきこえさせ給ふ、

流れゆく吾はみくづとなりはてぬ

亭子のみかど  
醍醐天皇の父  
帝宇多天皇。

山崎  
山城國乙訓郡。

君しがらみとなりてとゞめよ  
なき事により、かく罪せられ給ふを思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程きはめて悲しきこと多かり。日ごろ經て都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿のこずゑをゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて、作らしめたまへる詩いとかなし。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしましつきて、あはれに心細くおぼさるゝ夕、をちかたに處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙



また雲の浮きてたゞよふを御覽じて、  
なげきよりこそもえまさりけれ

山わかれ飛びゆく雲の歸りくる

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりとともと世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水のそこまでも

きよきこゝろは月ぞてらさん

これいとかしこく遊ばしたりかし。げに月日こそはてらし給はめ

とこそはあめれ。

まことにおどろくしき事はさるものにて、かくやうの歌や詩な  
どをさへいとなだらかにゆゑくしういひつゞけ給ふと、見聞く人  
目もあやにあさましくあはれにまもり居たり。物のゆゑ知りたる  
人などもむげに近く居よりて、外目せず見聞くけしきどもを見て、い

月日こそは  
禮記の「天無私覆、地無私載、日月無私照。」に據る。  
まことに  
こゝまでは大宅世嗣と云ふ此の物語する老人の詞であつて、まことに云々からはそれを聽いてゐる人の感歎の詞で、即ち記者の筆である。

繁樹

夏山繁樹といふ老人で、前の世嗣の相手筑紫に又世嗣の詞になる。

大貳

太宰大貳。當時は藤原興範。観音寺天智天皇の御草創。

文集

白氏文集。



菅公拜御衣圖

よいよはへて物をくり出すやうに言ひつゞくる程ぞ、誠にけうなるや。繁樹、涙をのごひつゞけうじみたり。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。観音寺只聽鐘聲。

これは文集の白居易の「遺愛寺鐘欵枕聽香爐峰雪撥簾看」といふ詩にもまさりざ

まに作らしめたまへりところ、昔の博士どもは申しけれ。又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしまし



九月のこよひ  
昌泰三年九月  
九日。

し時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとゞ作らしめ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いとゞそのをりおぼしめし出でて作らせ給ひける。

去年今夜侍、清涼、秋思、詩篇、獨斷、賜、  
恩賜、御衣、今在此、捧持、毎日、餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。此の事どもたゞちりぢりなるにもあらず。かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きあつめ、一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。又をりくゝの歌書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。世繼が若う侍りしとき、この事のせめてあはれに悲しく侍りしかば、大學の衆どもの生不學にはいますかりしを問ひたづね、語らひとりて、さるべき餌袋、わりごやうの物調じて、うち具してまかりつゝならひ

後集  
菅家後集。

とりて侍りしかど、老のけのはなはだしき事は、皆こそ忘れ侍りにけれ。これはたゞ頗る覺え侍るなりといへば、聞く人々、げにくゝいみじきすきものにも物し給ひけるかな。今の人にはさる心ありなんや。」と感あへり。

又雨のふる日  
又世嗣の詞。  
大鏡

文徳天皇から  
一條天皇まで  
十四代の事を  
記した歴史。  
藤原爲業の著  
といふ。

又雨のふる日うち詠め給ひて、

あめのしたかわけるほどのなければや

着てし濡衣ひるよしもなき

やがてかしこにて失せ給へり。〔大鏡〕

九 俳句選

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり  
元日や上々吉の淺黄空  
梅提げて來る禮者や七日過

蕪村  
一 茶  
子 規

蕪村  
與謝氏。攝津  
の人。天明三  
年歿。



一茶  
小林氏。信濃  
の人。文政十  
年歿。

子規  
正岡氏。伊豫  
の人。明治三  
十五年歿。

芭蕉  
松尾氏。伊賀  
の人。元祿七  
年歿。

古池や蛙飛込む水の音

日は暮れよ夜は夜明けよと鳴く蛙

悠然として山を見る蛙かな

あらたふと青葉若葉の日の光

富士一つ埋み残して若葉かな

傘たゝむ玄關深き若葉かな

絶えず人憩ふ夏野の石一つ

義朝の心に似たり秋の風

思ひ出て酔作る僧よ秋の風

秋風や脳味噌くさる芥子坊主

菊の香や奈良には古き佛達

芭蕉野分して盃に雨を聞く夜かな

鳥羽殿に五六騎いそぐ野分かな

芭蕉村茶

一芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

月天心貧しき町を通りけり

明月をとつてくれろと泣く子かな

草花をゑがく日課や秋に入る

いさゝかの價乞はれぬ暮の秋

行秋の鐘撞き料を取りに来る

初時雨猿も小蓑をほしげなり

化けさうな傘貸す寺のしぐれかな

背戸あけて家鴨呼込むしぐれかな

荒鷺の一羽くれゆく枯野かな

まつすぐに道あらはれて枯野かな

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村

芭蕉村



一〇 良澤とゲーテ

笠原道夫

前野良澤  
徳川時代の醫  
蘭學者。享和  
三年歿、年八  
十一。

笠原道夫

醫學博士。大

阪醫科大學教

授。大阪市の

人。

今日

明和八年三月

四日。

骨ヶ原

又小塚原。東

京の北方千住

にある。江戸

時代の處刑場。

ターヘルニア

ナトミア

和蘭語。解剖

圖譜の義。

中津藩侯

豊前中津藩主

奥平氏。

其の日は朝から薄曇の天氣であつた。前野良澤は鼠色の首卷に襟を埋めて、今日骨ヶ原で行はれる腑分の有様を色々心こころに浮かべながら、町を急いだ。左手に抱へた風呂敷包の中には、ターヘルニアトミアの表紙が角ばつてゐた。彼が中津藩侯に仕へてゐた時、藩の留學生として長崎に和蘭語を學んで居る中、漸くの思で手に入れた人身解剖の圖譜が此のターヘルニアであつた。風呂敷包の中には、其の外に、青木昆陽先生から戴いた和蘭文字略考と、長崎留學時代に覺えた二百餘言の和蘭語の手控の綴込が入つてゐた。途々、良澤は始めてターヘルニアを手にした時の自分を追想して見た。其處に描かれた人身五臟六腑の詳しい内景は、彼に取

青木昆陽  
徳川幕府の儒  
臣。甘薯先生  
と言はれた。  
明和八年歿、  
年七十二。  
表問守  
いづれも漢方  
の醫書の名。



前野良澤

つては全く驚異であり、解くべからざる謎であつたではないか。是まで素問靈樞難經などから得た人身内景の知識は、此のターヘルニアトミアの前には何の權威をも支へ得ないではないか。そして彼は四十九歳の今日、漸くターヘルニアに書かれてある和蘭語の、ロングは肺の臟、ハルトは心の臟、マングは胃の腑であることを知り、圖譜の一つ／＼を臚氣ながら會得し得るまでになつた艱難と自己の努力とを思つて見た。併しターヘルニアを繰返し／＼見ても、彼には未だ會得の行かぬ點が多かつた。一語を覺え一圖を解する毎に、彼の知識欲は愈燃えた。彼はターヘルニアトミアから得た知識だけでは満足することが出来なくなつて來た。紅毛碧眼と大和の民とは、其の人身内景も果して同じであらうかと、彼は久しく疑問を抱いてゐた。一度、二度、腑分の許を乞うたが



許されなかつた。三度目に漸く願が達せられた時、彼は眞實其の物にぶつかつたやうに思はれた。どうしても解くことの出来なかつた疑惑の雲が、今日の腑分で消失せるかと思ふと、彼の心臓は急に跳るのであつた。

骨ヶ原に着いたのは晝下りであつた。

仕置場から少し離れた物置部屋が腑分の場所であつた。門の傍に、杉田玄白中川淳庵などの知つた顔が五六人、寒さうに並んでゐた。一同連立つて這入つて行くと、十坪程の土間の眞中に、大牀と小牀とが列んで、白い布に包まれた首の無い死體は、大牀の上に横たはつてゐた。小牀の上には、首だけが、之も白い布に蔽はれて置かれてあつた。それは婦人の死體らしかつた。



白玄田杉

杉田玄白  
徳川季世の名醫。文化十四年歿、年八十五。  
中川淳庵  
明和の頃の名醫。幕府の醫官。

どん、どん、どんと、何處からとなく太鼓が鳴つた。聴て一人の役人が、二人の下部を連れて這入つて來た。役人は大牀の前へ進んで香を焚いた。二人の下部は土間に水を打つた。役人は内懐から祭文を取出して、靜かに讀出した。力のある低い聲が部屋に反響して、時喫驚する程大きく響いた。火の氣の無い物置部屋の中は、ぞくぞくする程寒かつた。

良澤はぢつと眼をつぶつて、懐に入れてあるターヘルアナトミアを強く押へた。體ぢゆうの血が心臓に逆流するやうな鼓動を感じた。

祭文は直ぐに濟んだ。良澤と玄白とは室の隅で何か耳打してゐたが、聴て良澤は二人の下部に目くばせして、靜かに大牀の右側に進んだ。左側には豫て頼んで置いた一人の畫工が、片手に半紙を展べながら、帯の間から矢立の筆を取出して、其の筆の先を前齒で噛んだ。



一人の下部は死體の上の白い布を引いた。果して首の無い婦人の死體が、冷たく牀の上に横たはつてゐた。

眞實を求めて漸くそれを得ることの出来た良澤は、感激の餘り、ターヘル・アナトミアを持つ手をわな／＼顫はせた。

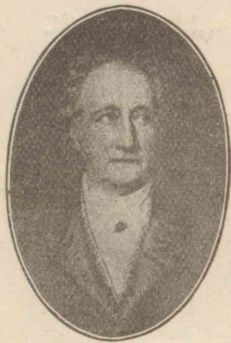
千住骨ヶ原で腑分があつてから四年の後、安永三年に、日本で初めての系統的に記載された醫書、解體新書が、良澤、玄白の苦心に依つて世に公にされた。

二

ワイマール  
ドイツのワイ  
マール國の首  
都。

ワイマールの花野は、まるで瑪瑙を溶いたやうな薄紅い靄で包まれてゐた。柔かい春の風が吹くと、靄はだん／＼薄らいで來た。空は丁度玉突臺の布のやうに眞青で、四邊には櫻草や釣鐘草が一面に咲亂れ、遠く彼方に白い漣を立ててイルム河が嘩くやうに流れてゐ

アゴニー  
死の苦悶。



テーゲ

た。其の小川のほとりて、雪のやうに白い大理石で造られた心臓形の臺の上に、一人の妙齡の少女が横たはつてゐた。今丁度水から引揚げたらしく、白い襯衣は水で吸着いたやうに圓い二の腕を包んで、黄金色の髪は折からの暖かい日の光に五色と輝いた。そしてアゴニーの様の少しも見えない顔の半面を靜かに此方へ向けてゐた。

其の傍に、二人の男が大きな解剖刀を握つて、何か聲高に言争つて居る。若い一人は白い襟卷のやうな物をぐる／＼首に巻いて、空色の長い上衣に、少し太い目の半ズボンを着いて居る。非常に大きな目、色艶の良い皮膚を持つてゐた。老人の方は白い鬚が目立つて、黒の長い上衣を着てゐた。老人は頻りに水死の少女の解屍を若い男に強ひてゐたのであつた。



吾が父

ドイツ語の祈禱文の句。

ゲーテ

ドイツの詩人

一七四九—

八三二年。

ストラスブル

グ

アルザス、ロ

レーヌの首都。

元ドイツ領。

若い男は頭を振つて、こんな美しい少女の體を、たとひ學術上どれだけの利益があるにしろ、滅裂させてしまふことは、美しい寶石を石に當てて砕いてしまふものだと言つて、頑固に抗爭し、そして、今度の醫學講習には、某彫刻師の手に成つた人體模型を用ふべきことを熱心に説いた。老人も遂に若い男の意見を容れて、解剖刀を捨て、諸共に跪いて、其の少女の死體の前に、「吾が父」を捧げた。

柔かい春の風は、二人の長い上衣の裾を燕の尾のやうに二つに分けて、更に臺上に横たはつて居る少女の美しい髪を戦がした。

若い男といふのは、其の當時醫學を學んでゐたゲーテ其の人であつた。老人はストラスブルグ大學の解剖學の教授ロープスタイン博士であつた。

三

美を尊重するゲーテの心持、眞實に對して敬虔な良澤の心持、此の

二つのものを同じやうに感じ得られる人は、世界で一番幸福な人であらう。

一一 遊戯主義

杉村楚人冠

杉村楚人冠

朝日新聞編輯

顧問。名は廣

太郎。和歌山

市の入。明治

五年生。

「必要を言ふな。理詰に來るな。勘定づくで埒を明けようとするな。必要と理詰と勘定とを去つて、ゆつたりと此の須臾の生活を樂まうではないか。菩薩は人を教ふること、さながら遊び戯るゝが如し。」とある。われ等も亦、心にわだかまりなく、遊ぶが如く戯るゝが如く、この世に處したい。これ即ちわが主義である。遊戯主義である。

遊戯主義と聞いて、直ちに浮世を三分五厘に見る事と解する勿れ。のらりくらりと遊んでばかり居る事と解する勿れ。必要に迫られずして爲すべきは爲し、理詰に詰められずしてわが本分を盡くし、勘



定づくを離れて一切の任務を道樂ごゝろに果さうとするものである。昔、印度のある王子は、森の中に鹿の群が如何にも面白さうに遊び戯れて居るのを見て、鹿どものかくまで楽しげなるを見るにつけても、お寺の僧共が、何等衣食の累も知らないで、何でもつと面白く暮らせないのであらうかと思つた。歸つてこの事を父なる王に話すと、王は何と思つてか、その翌日急に王子を王位に立たせて、

「七日間は思のまゝにこの國の政治を執れ。七日過ぎたならば汝を死刑に處すべし。」と申渡した。七日目になると、王子はげつそりと瘖せて王の前に出た。

「お前は、何でそんなに瘖せた。」

と王が問はれると、

「七日目に死ぬことばかり考へて、こんなに瘖せました。」

と答へた。すると王は、

「それ見よ、今の僧どもは死ぬ事ばかり考へてゐるから、何で楽しく遊ばれようぞ。」

と言はれたといふ。死の事ばかりでは無い、何事によらず考へてばかり居ては、世の中を楽しく送れるものでは無い。楽しく送れぬ世の中には、眞も善も美も無い。不承々々にする仕事は、能率の上からぬものと昔から定まつてゐる。

しかし、王位の七日間は短すぎた。若しこれが一月となり、半年一年となつてゐたならば、王子は必ずしも四六時中死のことばかりを考へて居なかつたらう。美しいものを見ては心嬉しくも感じ、かかしいものに接しては笑ひもしたに違ない。必ず死ぬに決つた病人も泣いてばかりは居らぬ。日數の立つ間には、自らその間に安住して、樂又その中にある事を悟る。これが「不遊戯裡に遊戯す。」といふ



佛光國師  
宋の僧祖元の  
勅號、謙倉園  
覺寺の開山。

ウエリントン  
ナポレオン一  
世をワテル  
ローに敗つた  
英國の將軍。

事である。宗教の極致は此處にある。佛光國師がまだ支那にゐた頃、元の軍兵の爲に取巻かれて、あはや白刃一過、身首處を異にせんとした時、彼はせかず慌てず、彼の「電光影裏春風を斬る」の一偈を誦した如きは、不遊戯裡の遊戯として學ぶべき態度である。ウエリントンが、航海中、夜更けて船室で靴を脱いで寢床に入らうとした時、あわただしく船長が飛込んで来て、

「只今、この船は沈みかけて居ります。」  
と知らせると、

「それでは靴を脱がずに置かう。」

と答へたといふ話がある。達人はかく不遊戯裡にも遊戯し得るが、これは不達人にはまねられぬ業である。

禮節といふも遊戯である。衣食の勘定に追はれるものは、禮節なんど顧みる暇は無い。「衣食足つて禮節を知る。」とは此處を謂ふ。

コントロール  
調節。

藝術といふも遊戯である。眞個憂國の政治家にとつては、政治も遊戯である。秀才には學校に通ふのが遊戯であつて、職に忠なる職工には工場通ひが遊戯である。宗教も、道德も、起臥も、飲食も、その境に達すれば皆遊戯だ。これを遊戯と見得ないのは、未だ其の境に達せずして、目が見えぬからである。芝居に連れて行かれた盲人に、眼前の面白い芝居が見えないで、只ざわ／＼と人の混雜する音だけが耳に入るのと同じだ。これが爲に芝居が面白くないと誰に言へる。人はよく調子に乗る。勢に乗じて自制力を失ふのである。これは下の部である。やゝ進んだものは自ら制して、我から努めて調子に乗ることを戒める。これは中の部である。最も進んだものは何等の自制を須ひないで、本來の面目そのままに自ら調子に諧ふ。これが上の部である。遊戯気分はこの邊から生ずる。例へば下手な聲樂家は、聲のコントロールが出来ず、われ知らず出る聲に、われ知ら



心の欲する所  
論語爲政篇の  
語

ず釣られて行つて、我が意に反した高さにも低さにもなる。所がや  
や上手な聲樂家になると、歌ふ一句々に節制を保つて、決して調子  
を外さぬ。それが更に一層上手な天才的聲樂家になると、態とらし  
い節制を加へずして、自然に樂々と出るに任せた聲が、ちやんと節度  
に諧つて居る。所謂心の欲する所に従うて矩を踰えざるもの。綽  
綽としてわが聲の中に遊戯してゐるのである。

語ることの巧ならぬものは、聽手の受方如何によつて言はでもの  
事まで言ふが、言はなければならぬ事は言はずにしまふ。傍若無人  
とはいかぬ。草稿を力にする演説者は草稿に囚はれ、振假名を便り  
に經讀む小僧は讀經の節にゆとりが無い。一々字を引かねば文字  
の平仄が解らぬ者に、詩の旨く作れよう筈が無い。一々秤にかけて  
調味の料を鹽梅する者に、眞の料理は出來ぬ。節制を離れて節度が  
あり、技巧を超絶して妙技がある。そこに遊戯があり、禮節があり、文

があり、詩があり、而して眞個の人間がある。

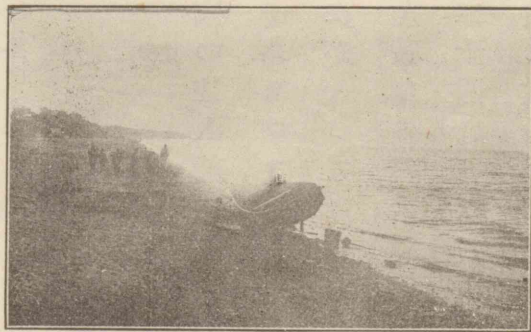
人生とは疲れて死ぬ事である。唯遊戯主義のみが其の疲を癒す。  
乃ち敢へて此處に遊戯三昧の哲學を薦める。蟲のるところ

### 一二 敦盛最期の事

さるほどに一の谷の軍破れしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直  
實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ちゆき給ふらん。  
あつばれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて、汀の方へ歩  
まする所に、こゝに練緯に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打  
つたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる斑生の  
矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍おいて乗つたり  
ける者一騎、沖なる船に目をかけ、海へさつと打入れ、五六反ばかりぞ  
泳がせける。



熊谷「あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなら  
も敵に後を見せ給ふものかな。かへさせ給へ、かへさせ給へ。」と、扇  
をあげて招きければ、招かれて取つてかへし、  
汀に打ち上らんとし給ふ所に、熊谷、波打際に  
ておしならべ、むずと組んで、どうと落ち、取つ  
ておさへて、首をかゝんとて、兜をおし仰のけ  
て見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。わ  
が子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかんな  
るが、容顔まことに美麗なり。「そも〜いか  
なる人にてわたらせ給ひ候やらん、名のらせ  
給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづ  
かういふ和殿は誰ぞ。「ものその數にては候はねども、武藏の國の住  
人熊谷の次郎直實。」と名のり申す。「さては汝がためにはよい敵ぞ。



須磨の浦

名のらずとも、首取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」とぞのたまひ  
ける。

熊谷、あつばれ大將軍や、この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍  
に勝つべきやうなし。また助け奉りたりとも、勝軍に負くることも  
よもあらじ。けさ一の谷にて、わが子の小次郎が、薄手負うたるをだ



平教盛

にも、直實は心苦しく思ふに、この殿討た  
れ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲  
しみ給はんずらめ。助け參らせんとて、  
後を顧みたりければ、土肥、梶原五十騎は

かりで出て来る。熊谷涙をはらくと流いて、あれ御覽候へ。いか  
にもして助け參らせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くに  
充ち満ちて、よも遁し參らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にか  
け奉つて、後の御孝養をも仕り候はん。」と申しければ、「たゞ何様に

土肥  
土肥次郎實平、  
梶原  
梶原平三景時。



も、とう／＼首を取れ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く／＼首をぞかいてげる。

あはれ弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂き目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかなと、袖を顔におしあてて、さめ／＼とぞ泣きゐたる。首を包まんとして、鎧直垂をといて見ければ、錦の袋に入れられたりける。笛をぞ腰にさゝれたる。あないとほし。この曉城の中にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時味方に、東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上臈はなほもやさしかりけるものをとて、これを取つて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理の大夫經盛の乙子、大

平家物語

軍記物語の一。  
平家の榮華に  
始まり、その  
滅亡に終る。  
後鳥羽天皇の  
御時、信濃前  
司行長の作と  
云ふ。

一三 忠度の都落

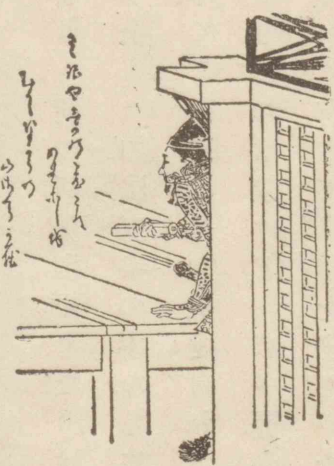
夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。平家物語

薩摩守忠度と申すは、入道の舍弟なり。淀の河尻迄下りたりけるが郎等六騎相具して、忍びて都に歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を叩く。内には是を聞きけれども、かゝる亂の世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども／＼開かざりけり。餘りに強く敲きければ、良久しく有つて、青侍を出し、戸を開かせて是を問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて参りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開きて對面あり。忠度宣ひけるは、かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮華盡きて都に安堵せず、西海へ落ち

入道  
淨海入道平清  
盛。  
俊成卿  
藤原氏。當時  
の歌道の大家



下り侍り。亡びん事疑なし。世静まりて後、定めて勅撰の沙汰候は  
 んか。たとひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草書き置く末の  
 言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出でて、河  
 尻より忍び上つて侍り。是ぞ年頃讀み集めたりし愚詠どもにて侍  
 る。身と共に波の下にみくづとな  
 さん事遺恨に侍り。是を砌下に進  
 らせ置き候。勅撰の時は必ず思召  
 し出でよ。」とて、卷物一卷泣くく  
 鎧の引合より取出したり。



忠度後成を訪ふ

三位感涙を流して是を受取り、御  
 詠一卷預り置き候ひ畢んぬ。是永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南  
 ならんか。此の忽劇の中に御音信に預る事、恐悦少からず候かな。  
 たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅

前途程遠  
 大江朝綱が、  
 「於鴻臚館」  
 「饒北客」序  
 の中の語。

千載集  
 後白河法皇の  
 時、藤原俊成  
 の撰した歌集。

撰の時は、思ひ出で侍るべし。」と宣へば、忠度今は身を波の底に沈め、  
 骨を山野に曝すとも思ふ事なしとて、馬に乗り、古詩を、  
 前途程遠馳思於雁山之暮雲、  
 後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚、  
 と打上げ、詠じつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には、後會  
 期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別なり  
 と思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。三位も残り  
 の惜しくして、遙かに是を見送りても、あはれ世に在りしには、此の人  
 どもにこそ諂ひ追従せしに、替る習とて、今は門を隔つる事の悲しさ  
 よ。」と、哀なるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られける。  
 代静まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度の此の道を嗜み、河尻よ  
 り上りたりし志を思ひ出で給ひて、故郷の花といふ題に、讀人しらず。  
 とて一首入れられたり。



源平盛衰記

應保から壽永まで二十餘年間の源平二氏に係る軍記。葉室時長の作といふが詳でない。

横山健堂

評論家。名は達三。明治五年山口縣生。

一茶

俳人。通稱小林彌太郎。信濃の人。文政十年歿、年六十五。

蕪村

俳人、畫人。與謝氏、名は寅。攝津の人。天明三年歿、年六十八。

芭蕉

俳聖。通稱松尾宗房。伊賀の人。元祿七年歿、年五十一。

上田秋成

國學者、歌人。大阪の人。文化六年歿、年七十八。

蜀山人

江戸の狂歌師。太田南畝。文政六年歿、年七十五。

中江藤樹

近江の儒者。

浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。哀にやさしくぞ聞えし。〔源平盛衰記〕

一四 歳晩の名家

横山健堂

「梟よのほゝんどころか年の暮。」梟を見付けたのはいかにも一茶らしいが、さすがの一茶にも、年末の切迫さが想はれる。そこになると蕪村は鶯だ。「鶯の啼くや師走の羅生門。」は美しい。芭蕉は、どこまでも解脱だ。「人に家を買はせて我は年忘。」「せつかれて年忘する機嫌かな。」或は、盗人に逢うた夜もあり年の暮。「分別の底叩きけり年のくれ。」等の句を誦すれば、年頭も年末もない。

剛愎な上田秋成は、白眼を以て一世を睨んでゐる。田舎に行つてゐた年の暮。

世の中にさはらで年もくれにけり  
八重葎さへかれし垣根は

その寒生涯が想ひやられる。それと反對に、平々然として、極めて樂觀的の氣分を見せてゐるのは蜀山人だ。彼の年末の歌のうちには、一つも陰氣な窮屈な心持はない。いつも春風だ。世を茶化してゐる。

いまさらに何か惜しまん神武より  
二千年來くれて行く年  
年波のいまや越えんと門々に  
たてし師走の末の松山

中江藤樹が、熊澤蕃山の岡山に出仕するのを送つたのは年の暮だ。



慶安元年歿、年四十一。

熊澤蕃山

京都の儒者。字は了介。元祿四年歿、年七十三。

山陽

學者、詩人。賴氏。安藝の人。天保三年歿、年五十三。

舊年無幾日、何意上旗亭、送汝青雲器、愧吾犬馬齡、梅花鬢邊白、楊柳眼中青、惆悵滄江上、西風教客醒、此の雄偉な師弟の相別れる心持が、歳晚氣分の中に溶けてゐる。歳晚の作として千古の名篇、堂々たる近江聖人の面影が偲ばれる。山陽の詩集に歳晚の作が多い。その特色は、彼が家庭に執着してゐる心持だ。故郷を出た翌年の暮には、一出郷關歳再除、慈親消息定如何。」といひ、五年目の除夜には、故郷の兩親が、吾が子の事を話し合つて眠らないでゐるだらうと想ひやりを述べてゐる。九州の遠遊を試みたときは、下關で年を送つた。赤間關守歳詞がある。誰でも三十九、四十の歳晚は殊に感觸が深い。山陽にも平頭四十驚、吾老の一句がある。漢學者は四十以上を翁と云つたから、今人に比べると感慨は格別だ。

晩年に近づいてからの山陽の除夜の作には、おひく、世帯の好く

なつて來てゐるのが分る。「妻償舊債了、兒著新衣成。貧家祭酒掃燈火亦覺明。」といふのは、貧家と言ひつゝも始めて工面の好い年末を味はつたのだ。その次はますく、好い。

細君拮据鬢蓬麻、  
婢辨辛盤僕掃家、  
獨有主翁無一事、  
出從村路覓梅花。

東湖は政治家で、交際には力めた。

そして清貧であつた。夏物と冬物とを質に入替する手紙が傳はつてゐるくらいだから、彼の歳晚は思ひやられる。然るに嘉永五年の暮、彼四十七歳、俸祿が復舊される内報に接した時の手紙のうちに、例の東湖、更にそれを承知しなかつたとあるのを見ても、その度胸の程は推しはかられるではないか。



山陽

東湖  
水戸藩儒、藤田氏、名は彪、安政二年歿、年五十。



大槻磐水  
仙臺藩醫。名は玄澤。文政十年歿、年七十一。

蘭學者の大槻磐水は、六十二歳の年の暮に歌がある。  
楓弓（カエデ）のはるは六十路に三そへて  
射るがごとくに過ぎし年の矢  
洒落の歌だ。此の人が始めて和蘭正月、即ち太陽曆の新年宴會を催したことは有名な話だ。

伊能忠敬  
曆學者。下總の人。文化十四年歿、年七十四。

伊能忠敬の生涯は、努力の結晶だ。老いて益、精神旺盛だ。五十以後に、測量の大偉業を始めたので、新年も年末もなかつた。文化八年、六十八歳のときに、大旅行をした。東海道藤澤から測量を始めて、十二月の十七日に興津までをすませ、それから無測量で西進し、續いて薩摩まで行つた。彼と共鳴した間宮倫宗は、此の頃蝦夷地探險を思ひ立ち、年末に、二人は東西に分れて大旅行の首途に上つた。彼等は、惜時の精神から、かう

必有我師  
田東湖筆蹟

田東湖筆蹟

物徂徠  
柳澤侯儒。通稱惣右衛門、字は茂卿。江戸の人。享保十三年歿、年六十三。

いふ態度になつたので、物徂徠が、年末も年頭も、蓬頭で一心に机に向つてゐたといふのと同じ類だ。

吉田松陰  
幕末の志士。名は矩方、通稱寅次郎。萩藩士。安政六年歿、年三十三。

吉田松陰は二十二歳の十二月に、脱藩して江戸を出發し、東北遊の旅行を試みた。先づ水戸學を研究のため水戸に行き、その二十九日、瑞龍山に登つて黃門の墓に謁し、太田で年を送つたのを手始として、

黃門  
水戸藩主徳川光圀。元祿十三年歿、年七十三。

年々、戦争のやうな歳晩を送つてゐる。二十五歳の春、下田で米艦に投ずるの壯舉が破れて、その年の暮は萩に送り還され、野山獄で除夜を過した。年の暮に、獄中で幽囚録を書き、除夜の詩に、壯士休（ヨシヤ）爲（ユ）歲暮（トシノヨ）の句を成した。その二十六歳の除夜は家に歸つてゐた。松下村塾を創める前年だ。此の夜、記往時（キキウジ）の一篇を作つて、下田投艦の時の回憶を書いた。二十九歳、即ち彼が最後の歳晩だ。再び野山獄に投ぜられて、生死未だ測る可らざるの時、除夜の句に、  
燈火の影靜かなり年の暮



燎原の火のやうな情熱ある此の人にして、此の静かな句がある。哲人の面影が見られる。

新島襄  
宗敎家、教育家。明治二十三年歿、年四十八。



新島襄

新島襄が初めて米國から歸朝して、郷里の上州安中に歸省したのは、明治七年十一月の末である。それから歳晩の二十日餘りを父母の膝下に送り、此の間に初めて傳道を試み、更に同志社を大坂に開設するの目的を以て年末に上方へ往つた。同志社の創業は、かくの如く年末に出發してゐる。

一五 近世短歌選

戸田茂睡  
歌學者。江戸の人。寶永三年歿、年七十八。

ぬれて鳴く山時鳥五月雨の  
古巢やおもふ親や戀しき

戸田茂睡

契沖  
國學者。攝津の人。元祿十四年歿、年六十二。

契沖

初瀬のや里のうなみに宿とへば  
霞める梅の立枝をぞさす  
わけ入りてとふもかたるも静けしや  
やまとの書の深き教に

荷田春満

賀茂真淵  
國學者、歌人。遠江の人。明和九年歿、年七十三。

賀茂真淵

うら／＼とのどけき春の心より  
にほひ出でたる山櫻花  
こほろぎの待ち喜べる長月の  
清き月夜は更けずもあらなん  
信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷺の  
翼もたわに吹く嵐かな



田安宗武

國學者、歌人。  
將軍吉宗の第三子。明和八年歿、年五十七。

千鳥すら友呼びかはし遊ぶなり

田安宗武

などてや人の獨り樂しむ

本居宣長

國學者、伊勢の人。享和元年歿、年七十。

本居宣長

たぐひなき櫻の花を見ても知れ

わが大君の國の心を

散るまでは世の營みもすてて見ん

花の日數はいくばくもあらず

小澤蘆庵

歌人。尾張の人。享和元年歿、年七十九。

小澤蘆庵

大井川月と花とのおぼろ夜に

ひとり霞まぬ浪の音かな

小鳥おふ鳴子の繩に手をかけて

竹の端山の夕日をぞ見る

今日の雨に萩も尾花もうなだれて

愁へがほなる秋の夕暮

加藤千蔭

加藤千蔭  
國學者、歌人。  
文化五年歿、年七十四。

墨田川みの着て下す筏士に

霞むあしたの雨をこそ知れ

上田秋成

上田秋成  
國學者。歌人。  
大阪の人。文化六年歿、年七十八。

都邊はちまたの柳園の梅

かへりみ多き春になりけり

紀の海や南のはての空見れば

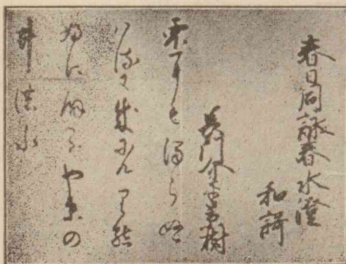
汐けに曇る秋の夜の月

香川景樹

香川景樹  
歌人。鳥取の人。天保十四年歿、年七十六。

大井川かへらぬ水に影見えて

今年も咲ける山櫻かな



景樹筆蹟



熊谷直好  
歌人。周防岩國の人。文久二年歿、年八十一。

夕日さす浅茅が原に亂れけり  
薄くれなるの秋のかげろふ  
汐ひれば眞砂つゞきとなりけり  
沖の小島と思ひしところ

熊谷直好

木下孝文

歌人。體中の人。文政四年歿、年四十三。

春の色すみれにのみぞのこりける

木下孝文

片山里の麥のなか道

八田知紀

歌人。薩摩の人。明治六年歿、年七十五。

うつせみのわが世の限り見るべきは

八田知紀

嵐の山の櫻なりけり

平賀元義

歌人。備前の人。慶應元年歿、年六十六。

わだつみの潮の八百路の八潮路ゆ

平賀元義

吹き來る風は涼しかりけり

井手曙覽

井手曙覽  
歌人。福井の人。明治元年歿、年五十七。

たのしみは紙をひろげてとる筆の

思ひの外によく書けし時

たのしみは心をおかぬ友どちと

笑ひかたりて腹をよる時

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に

み國忘れぬ人を見る時

大隈言道

大隈言道  
歌人。福岡の人。慶應四年歿、年七十一。

見渡せば川に沿ひたる堤さへ

流るゝ水の姿なるかな

おのが身にまがふばかりになれる子を

なほはぐゝめる親鳥かな



良寛

歌僧。俗名山本榮藏。越後の人。天保二年歿、年七十四。

霞たつながき春日を子供らと

良

寛

手まりつきつゝ今日もくらしつ

蹟筆寛良

風はきよし月はさやけしいぎ共に

をどり明さん老の名ごりに

垂乳根の母のかたみと朝夕に

佐渡の島根をうち見つるかな

一六 鉢木

ワキ「行くへ定めぬ道なればく、來し方もいづくならまし。

シテ 佐野源左衛門常世。  
ツレ 常世の妻。

ワキ

信濃なる淺間の嶽に立つ煙

遠近人の見やほとがめぬ。  
(在原業平)

大井山

信濃國北佐久郡大井庄にある山。

友の里

同郡伴野庄。離坂

同郡香掛と輕井澤との間。

うすひ川

碓氷から出て上野國の烏川に入る。

板鼻

上野國高崎の西二里。

佐野

高崎の東南半里。

是は一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなりて候程に、先づ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

信濃なる淺間の嶽に立つ煙く、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身に無き友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけりく。

ワキ「急ぎ候程に、是は早上野の國佐野のわたりに着きて候。餘りの大雪にて候程に、此の處に宿を借り泊らばやと思ひ候。如何に、此の家の内へ案内申し候。

ツレ「誰にて渡り候ぞ。

ワキ「是は修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、お宿は叶ひ候まじ。



雪は鷺毛に似

白樂天の句。  
(和漢朗詠集)

陸奥のけふ  
陸奥國狭布の  
里。

ワキ「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。

ツレ「それはともかくもにて候。

シテ「あゝ、降つたる雪かな。如何に世にある人のおもしろう候らん。

それ雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴髦を被て立つて徘徊すと云へり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、我は鶴髦

を被て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖狭き、細布衣陸奥のけふの寒さを如何にせん。あら、面白からずの雪の日やな。

や、此の大雪に、何とて是には佇みて御入り候ぞ。

ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候程に、御留守

の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候程に、是まで参りて候。

シテ「さて其の修行者は何處に渡り候ぞ。

ワキ「我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪に前後を

忘じて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。

シテ「易き程の御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、お宿は叶ひ

候まじ。此の山ばなをあなたへ十八町程御出で候へば、山本の里と申して泊の候。日の暮れぬ先に、只一足も御急ぎ候へ。

ワキ「さては、しかとお貸しあるまじにて候か。

シテ「御痛はしくは候へども、我等二人さへ住み兼ねたる體にて候程に、中々思ひも寄らず候。

ワキ「あら、曲もなや。由なき人を待ち申して候。

ツレ「淺間しや、我等斯様に衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては斯様の人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然

るべくはお宿を参らさせ給ひ候へ。

シテ「あら、何ともなや。さやうに思召さば、など前には承り候はぬぞ。いや、此の大雪に未だ遠くは御出で候まじ。某追付き止め申さう。

山本の里  
上野國群馬郡  
八幡村大字根  
小屋の舊名。



駒こめて  
藤原定家の歌。  
三輪が崎  
大和國磯城郡。

なうく、旅人お宿參らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬ  
げに候。痛はしの御有様やな。もと見し雪に道を忘れ、今降る雪  
に行き方を失ひ、唯一所に佇みて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ  
氣色、古歌の心に似たるぞや。『駒とめて袖打拂ふ陰もなし、佐野の  
わたりの雪の夕暮。』斯様に詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野  
のわたり。

同「是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ勞れ給はんより、見苦し  
く候へど、一夜は泊り給へや。

一樹の陰  
宿一樹下、  
波二河流、一  
夜同宿、一日  
夫妻、皆是先  
世結縁。説法  
明眼論。

同「げに是も旅の宿、く。假初ながら値遇の縁、一樹の陰の宿りも此  
の世ならぬ契なり。それは雨の木陰、これは雪の軒ふりて、うきねな  
がらの草枕、夢より霜や結ぶらんく。』  
シテ「なう渡り候か。修行者にお宿は參らせて候へども、何にてもあ  
れ參らせうざる物も無く候は如何に。」

ツレ「折節是に粟の飯の候。苦しからずば參らせられ候へ。」

シテ「さらば其の由を伺ひ候べし。」

如何に申し候。お宿は參らせて候へども、何にてもあれ聞召され  
うざる物も無く候。折節是に粟の飯の候。苦しからずばそと聞  
し召され候へ。

ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」

シテ「總じて此の粟と申す物は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承つて  
候に、今は此の粟を以て身命をつぎ候よ。げにや廬生が見し榮華  
の夢は五十年、其の邯鄲の假枕、一睡の夢の覺めしも、粟飯炊ぐ程ぞ  
かし。あはれや、げに我も打ちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む  
事もあるべきに、なう御覽ぜよ、斯程まで、  
同「住みうかれたる古郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず、  
なに思ひ出のあるべき。」

廬生  
唐の開元頃の  
人。邯鄲で粟  
飯の熟するを  
待って一睡す  
る間に、榮華  
を極めた五十  
年間の夢を見  
たといふ支那  
の傳説。



シテ「あら笑止や。夜の更くるについて次第に寒くなりて候。焚火をしてあて申したくは候へども、恥づかしながらさやうの物も無く候。これなる鉢の木を伐り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ「御志はさる事にて候へども、それは思ひも寄らず候。

シテ「某もと世にありし時は、鉢の木にすぎ數多持ちて候へども、斯様に散々の體と罷成り、いや〜木好きも無用と存じ、皆人に參らせ候。さりながら、未だ三本持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。是は梅櫻松にて、某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、此の木を伐り、火に焚いてあて申さう。

ワキ「以前も申す如く、御志は有難う候へども、自然又お事世に出て給はん時の御慰にて候間、なか〜思ひも寄らぬ事にて候。

シテ「いや、とても此の身は埋木の、花咲く世に逢はん事は、今此の身にては逢ひ難し。

埋木の  
埋木の花咲く  
こともなかり  
しに身のなる  
はてぞかなし  
かりける。(頼  
政、平家物語)

ツレ「只徒らなる鉢の木を、御僧の爲に焚くならば、

シテ「是ぞ誠に難行の、法の薪と思召せ。

ツレ「しかも此の程雪降りて、

シテ「仙人に仕へし雪山の薪、

ツレ「斯くこそあらめ。

シテ「我も身を、

同「捨て人のための鉢の木、きる

とてもよしや惜しからじと、雪

打拂ひて見れば面白や如何に

せん。先づ冬木より咲初むる、

窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先づ先立てば、梅をきりや初むべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪になすべしと豫て思ひきや。櫻を

窓の梅  
池凍、東頭風度、  
解。窓梅北面  
雪封寒。(朗詠  
集)  
見じといふ  
山里の折りが

シテ「我も身を、  
捨て人のための鉢の木、きる  
とてもよしや惜しからじと、雪  
打拂ひて見れば面白や如何に  
せん。先づ冬木より咲初むる、  
窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先づ先立てば、梅をきりや初むべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪になすべしと豫て思ひきや。櫻を



け垣のうめの  
花いかなる人  
の見じといふ  
らん。(菅家)

松はもとより

此の以下の二  
句、正しくは  
「松はもとよ  
り煙にて、た  
き」となるも  
ことわりや」  
とあるべきを  
かう改めて諺  
ふ慣はしにな  
つてゐる。

みかきもり

御垣守衛士の  
たく火の夜は  
もえて晝は消  
えつゝものを  
こそおもへ。  
(大中臣能宣)

見れば春毎に、花少し遅ければ、此の木や詫ぶると心を盡くし育てしに、今は我のみ侘びて住む、家櫻きりくべて、ひ櫻になすぞ悲しき。

シテ「さて松はさしもげに、

同「枝を矯め葉をすかして、かゝりあれと植置きし、其のかひ今はあら

し吹く、松はもとより常磐にて、たきゝとなるは梅櫻、伐りくべて今ぞ

みかきもり、衛士の焚く火はおためなり。よく寄りてあたり給へや。

ワキ「御志により、寒さを忘れて候。如何に申し候。主の御名字をば

何と申し候ぞ、承りたく候。

シテ「いや、某は名も無き者にて候。

ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。何の苦しう候べき、御

名字を仰せ候へ。

シテ「此の上は何をか包み候べき。是こそ佐野の源左衛門常世が成

れる果にて候。

最明寺殿  
北條時頼。

ワキ「それは何とて斯様に散々の體には御成り候ぞ。

シテ「一族どもに押領せられ、斯様に散々の體となりて候。

ワキ「さらばなど鎌倉へ御上り候ひて、御沙汰には出され候はぬぞ。

シテ「運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出での上は候。斯様に

落ちぶれては候へども、今にてもあれ、鎌倉に御大事出で来るなら

ば、ちぎれたりとも此の具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を

持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ着到につき、さて

合戦始まらば、

同「敵大勢ありとて、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひ打合ひ

て、死なん此の身の此の儘ならば、徒らに飢に疲れて死なん命、なんぼ

う無念のこと候ぞ。

ワキ「よしや身の、斯くては果てじたゝ頼め、我世の中にあらん程、又こ

そ参り候はめ、暇申して出づるなり。

たゝ頼め  
たゝ頼めしめ  
じが原のさし  
も草われ世の  
中にあらんか  
ざりは。新古今集)



ツシテ「名残惜しの御事や。初は包む我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは止まり給へや。」

ワキ「止まる名残のまゝならば、さて幾たびかゆきの日の、

ツレ「空さへ寒き此の暮に、

ワキ「いづくに宿をかりごろも、

シテ「けふばかり止まり給へや。」

ワキ「名残は宿に止まれども、暇申して、

ツシテ「御出でか。」

ワキ「さらばよ、常世。」

ツシテ「又お入り。」

同「自然鎌倉に御上りあらば御尋ねあれ。けうがる法師なり。かひがひしくはなけれども、披露の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど、言捨てて出船の、ともに名残や惜しむらん、く。」

二

後シテ  
常世。  
ワキ  
時頼。  
ツレ  
近臣。  
狂言  
従者。

後シテ「如何にあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは誠か。なに、夥しう上るとや。おうさぞあるらん。東八箇國の大名、小名、思ひくゝの鎌倉入、さぞ見事にてや候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を延べたる太刀刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きらびやかに、打連れくゝ上る中に、常世が常に變りたる、馬物具や打物の、物其の物にあらざる氣色。さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。」

同「急げどもくゝ、弱きに弱き柳の絲の、

シテ「よれによれたる瘦馬なれば、

同「打てもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。」



ワキ「如何に、誰かある。」

ツレ「御前に候。」

ワキ「國々の軍勢共は皆々來りてあるか。」

ツレ「さん候。悉く參りて候。」

ワキ「其の諸軍勢の中に、如何にもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し候へ。」

ツレ「畏つて候。」

如何に誰かある。

狂言「御前に候。」

ツレ「君よりの御諚には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へ參れとの御事にて候。」

狂言「畏つて候。」

如何に申し候。

シテ「何事にて候ぞ。」

狂言「急いで御前へ御參り候へ。」

シテ「何と、某に御前へ參れと候や。」

狂言「なか／＼の事。」

シテ「あら、思ひ寄らずや。定めて人たがへにて候べし。」

狂言「いや／＼、其の方の事にて候。其の仔細は、諸軍勢の中にて、如何にも見苦しき武者を連れて參れとの御事にて候が、見申せば、そなたほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候へ。」

シテ「何と。たとへば諸軍勢の中に、如何にも見苦しき武者に參れと候や。」



狂言「なか〜」の事。

シテ「さては某が事にて候べし。畏つたると御申し候へ。」

狂言「心得申し候。」

シテ「げに〜是も心得たり。某敵人謀叛人と申しかすめ、御前へ召出され、頭を刎ねられん爲なるべし。よし〜それも力なし。いで〜御前に參らんと、大床さして見渡せば、

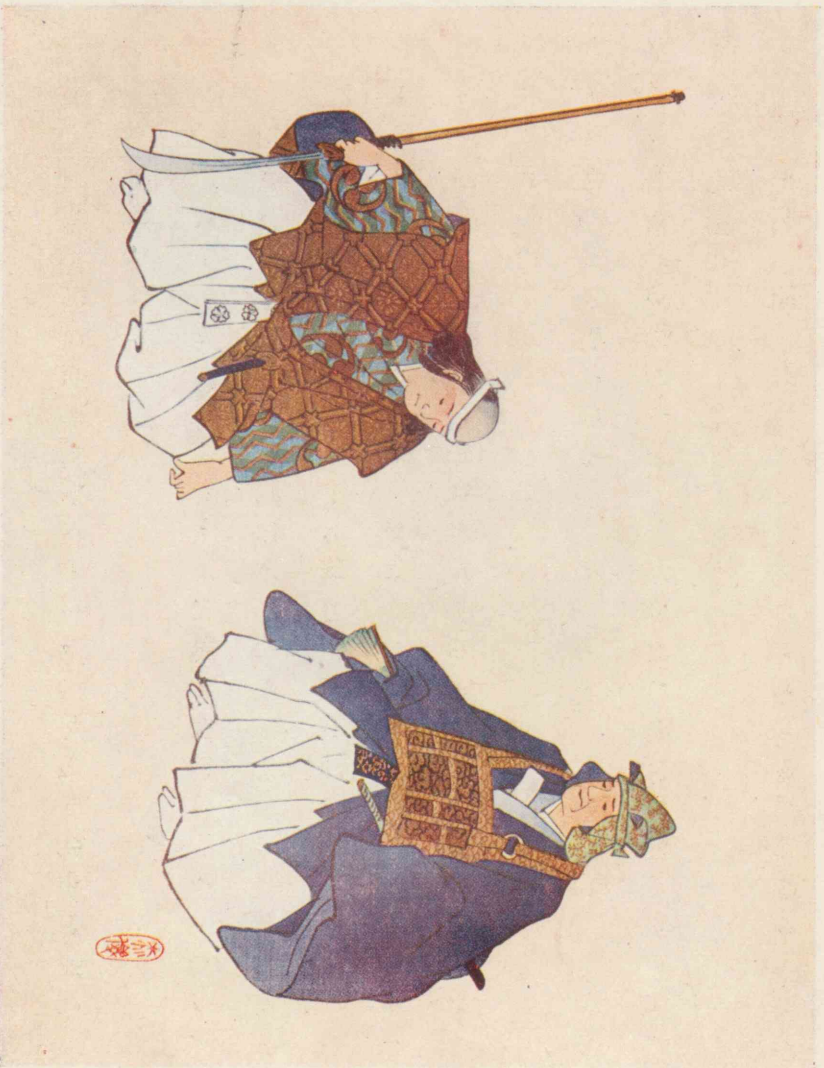
同「今度の早打に、〜、上り集るつはもの、綺羅星の如く並み居たり。」

さて御前には諸侍、其の外數人並み居つゝ、目を引き指をさし、笑ひ合へる其の中に、

シテ「横縫のちぎれたる、

同「古腹巻に鎗長刀、やう〜に横たへ、悪びれたる氣色もなく、參りて御前に畏る。」

ワキ「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門常世か。これこそいつ





ぞやの大雪に宿借りし修行者よ、見忘れてあるか。いで汝佐野にて我に申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事出で来るならば、ちぎれたりとも其の具足取つて投げかけ、錆びたりとも其の長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参すべき由申しつる、言葉の末をたがへずして、参りたるこそ神妙なれ。先づ今度の勢遣ひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當参の人々も、訴訟あらば申すべし。理非に依つて其の沙汰致すべき所なり。先々沙汰の始には、常世が本領佐野の莊三十餘郷、返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を伐り、火に焚きあてし志、何時の世にかは忘るべき。いで其の時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松えだ、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、



シテ「常世は之を賜はりて、

同「常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、初め笑ひしともがらも、是程の御氣色さぞ羨ましかるらん。

さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。

シテ「其の中に常世は、

同「その中に常世は、喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め此の馬に、打乗りてかみつけや、佐野の船橋取離れし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける、く。」「寶生流謠

### 一七 狐塚

主人「此の邊の者でござる。某、山田を數多持つてござる。當年は殊の外好う出來てござる。さりながら、此の頃は鹿猿貉が出て田を荒らします。太郎冠者を喚び出し、山田の番に遣らうと存ずる。

やい／＼、太郎冠者あるか。

太郎「はあ、御前に居ります。

主人「汝を呼出すこと別の事でない。當年は身共の山田が殊の外好う出來た。それに付き、日頃は鹿猿貉が田を荒らす程に、汝は今夜山田へ行つて、鳥獸も來らば逐うて番をせい。

太郎「畏まつてござる。私一人でござるか。

主人「いや、後程は次郎冠者も見舞に遣らう程に、先づ行け。

太郎「心得ました。

主人「さりながら、此の中は狐塚の狐が出て化すと云ふ程に、化されぬやうにして、番をせい。

太郎「夫はこはいこととてござる。最早參ります。

主人「明日早々歸れ。

太郎「はあ。



主人「えい。

太郎「はあ。

道行「扱もく、迷惑なことを言ひ付けられた。夜晝使はるゝと云ふは氣の毒なことぢや。參る程にこれぢや。先づ是に居て、番を致さう。」

主人「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やい〜。次郎冠者あるか。」

次郎「これに居ります。」

主人「汝は大儀ながら、山田へ行つて、太郎冠者がとぎをしてやれ。」

次郎「畏まつてござる。」

主人「小筒もちと持つて行け。」

次郎「心得ました。是はさて迷惑なれども、參らばなるまい。主命

ぢや。是非に及ばぬ。是は暗うて、何處やら知れることて無い。

呼ばはつて見よう。ほい〜、太郎冠者やい。何處に居るぞ。

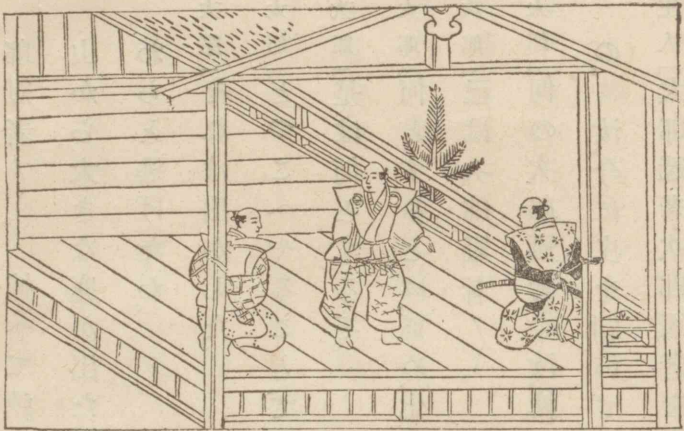
太郎「さればこそ狐が出た。彼は次郎冠者が聲ぢや。好う似せた。汝おのれ化さるゝことでは無いぞ。先づ眉毛を濡さう。」

次郎「ほい〜。」

太郎「ほい〜。此處に居るわ。」

次郎「何處に居るぞ。」

太郎「此處に居るわ。やあ、次郎冠者か。次郎「なか〜。頼うだ人が言ひつけ



狐 塚

られて、伽に來たわ。



太郎「好うこそおりやつたれ。さてもく、好う化けた。其の儘の次郎冠者く。捕へて縛つてやらう。やい、次郎冠者。最前向うの山から大きな鹿が出たを、身共が逐うたれば、此方の山へくわらくわらと逃げたわ。

次郎「それは出かした。

太郎「どつこへやることでは無いぞ。

次郎「是は何とするぞ。

太郎「何とするとは、狐め、化さるゝことでは無いぞ。

次郎「己は次郎冠者く。

太郎「何の次郎冠者。汝、縛つて此の柱に括つて置いて。狐殿、よい姿なりの。汝、今に皮を剥いでくれようぞ。」

主人「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心許なうござる。見に參らうと存ずる。ほいく、太郎冠者やい。次郎冠者やい。」

ほいく。

太郎「是は如何な事。又狐が出居つた。彼は頼うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。ほいく。」

主人「ほいく。何處に居るぞ。」

太郎「此處に居ます。」

主人「やあ、これに居るか。淋しからうと思つて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。」

太郎「なかく、彼處に居ます。是は如何な事。是も好う化けた。」

其のまゝ、頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれ、騙さるゝことでは無いぞ。

主人「是は何とするぞ。身共ぢや。」

太郎「おのれも好う化けた。先づ縛つて此の太木に括り付けて置いて、致しやうがある。狐は松葉で燻べると嫌がると云ふ。燻べて



やらう。さあ、尾を出せ。鳴け。

主人「汝、太郎冠者め。主を此の様にして。罰當りめ。」

太郎「何を狐殿言はる。さらば、次郎冠者狐も燻べてやらう。さあ

さあ、鳴け。こんくと言へ。

次郎「是は何とする。」

太郎「ありやく。厭がるわ。汝二匹ながら、鎌を取つて来て、皮

を剥いてくれうぞ。待つて居れ。よう化さうと思つたなあ。只

今殺してくれうぞ。鎌を取つて来るぞ。」

主人「さて、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。

次郎「左様でござる。こなたは頼うだ御方か。」

主人「なか。汝も縛り居つたか。」

次郎「いかにも縛られました。」

主人「何と、鎌を取つて来る、殺さうと言ひ居つたが、何と其方が繩は解

かれぬか。

次郎「されば、どうやら繩が解けさうにござる。解けますぞ、解けます

ぞ。さあ、解きました。どれ、此方も解きませう。さてもさ

ても、憎い奴でござる。何としたものでござらう。」

主人「いや、此の態では側へ寄るまい程に、元の様にして居て、こ

れへ来たならば、捕へて彼奴をゆりに上げう。」

次郎「一段と好うござらう。」

主人「さあ、これへ寄つて、元の様にして居よ。」

次郎「心得ました。」

太郎「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。」

さあ、今打殺すぞ。」

主人「そりや、次郎冠者。」

次郎「心得ました。」



主人「汝は憎い奴の。次郎冠者、足を持って。次郎「心得ました。

主人「さあ、ゆりに上げ、く。

太郎「これは、何と狐共するぞ。

主人「狐とは、まだ汝めは。憎い奴の。縛り居つたがよいか。これが

好いか。

太郎「さては、頼うだ人。次郎冠者か。許させられ。眞平御許され、御

許され。

二人「何處へうせる。やるまいぞ、く。」〔續狂言記〕

### 一八 萬里長城

土井晚翠

生ける歴史か數ふれば 影は萬里の空遠き  
齡は高し二千年 名も長城の壁の上

土井晚翠  
詩人。第二高等學校教授。名は林吉。明治四年仙臺市生。

落日低く雲淡く

關山看すく暮れんとす

征驂悵みとままりて

俯仰の遊子身はひとり

絶域花は稀ながら

平蕪の綠今深し

春乾坤に回りては

霞まぬ空も無かりけり

天地の色は老いずして

人間の世は移らふを

歌ふか高く大空に

姿は見えぬ夕雲雀

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ

歳は流れぬ千歳の

昔に返り何の地か

かれ秦皇の覇圖を見ん

残壘破壁聲も無し

恨も暗し夕まぐれ

春朦朧のたゞ中に

俯仰の遊子身はひとり

邦は亡びて邦に次ぎ

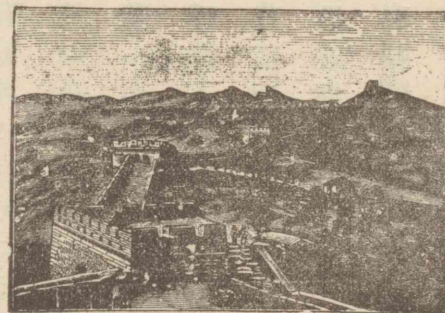
人は代りて人を追ふ

鼎は移る朝二十

歳は流るゝ曆二千



中華幾たび烽舉り  
又こえ去りし國民の



萬里長城

民の膏血世の笑  
歴史の色に染められし  
其の面影に忍びでて

長城の壁越えきたり  
入數さへいかに世々の跡  
山川影はかはらねど  
春夢空しく跡も無し  
群雄の覇圖いたづらに  
残すは獨り史上の名  
獨り邊土に影絶えず  
齡重ねて二千歳  
殘壘苔に今青む  
長城の影たふとしや  
虐政の形見それながら  
萬里の影ぞなつかしき  
泣くは懐古の露のみか

暮春の恨誰がために

霞も咽ぶ夕まぐれ

霞も咽ぶ夕まぐれ  
北夷禦ぎし長城の  
時世空しく流れては  
秦漢魏晉移り行く  
西の嵐の吹き寄する  
西曆一千九百年  
中華の光先王の  
愛を四海に傳ふべき  
看ずや豺狼の慾飽かて  
群羊守る力無く  
俯仰古今の物思

遊子俯仰の物思  
昔の跡はかはらねど  
中華の姿あすいかに  
昔の跡に引換へて  
黄海の波今あらし  
東亞の嵐あすいかに  
道此の民を救ひ得じ  
神人の教いま空語  
基督教徒血を啜り  
異郷の民の聲呑むを  
遊子の恨いつ盡さん



征驂悵み嘶ける  
響をかへす壁のもと  
思も遠く眺むれば  
霞たゞよふ大空の  
自然の樂も絶え果てつ  
關山暮れて星出でて  
恨を含む長城の  
姿は闇に吞まれ行く。〔曉鐘〕

一九 長良堤の訣別

坪内逍遙

長良堤の訣別  
脚本「桐一葉」  
の大詰の場。  
時は慶長十九  
年九月の末。  
長良堤  
大阪城の北、  
淀川の堤。  
坪内逍遙  
劇作家、文學  
者。文學博士。  
名は雄藏。安  
政六年岐阜縣  
生。  
大野  
修理亮治長。

本舞臺一面の道具幕、長良堤の一部の心にて、深霧を透して朧に大阪城の  
天守見ゆる體。夜明方。幕あくど、大野の家來白倉權六、鐵砲を携へたる  
雜兵大勢を連れ、立ちかゝり居る。  
トばた／＼にて同じ大野の家來神崎治右衛門、向う揚幕より駈出で來る。  
白倉すかし見て、  
白「神崎氏でござるか。  
神「白倉氏か。片桐主従は程なく是へ参りますぞ。御油斷めさる

片桐

市ノ正且元、豊  
臣家の重臣。  
「桐一葉」は此  
の人を主人公  
としたもの。

な。

白「心得申した。昨日彼が屋敷を圍み、お討取あるべきお手筈なりし  
が、修理亮様の御智略にて、わざと彼等の英氣を抜き、落行く途中で  
討取る魂膽。  
神「ねらひの的は且元一人、三十餘挺いつとときに、彼を目あてに切つて  
放たば、討洩すことはよもあるまい。  
白「者共必ずぬかるまいぞ。  
皆々「心得ました。

ト此の時鐵砲の音して、神崎に中り、よろしく落入る。是にて一同驚きあ  
わてる。途端に下手より片桐が家來本村等を先に、家來大勢、何れも陣立  
にて抜きつれて出で、  
本「斯くあらんと豫ての手くばり、主君を守護する我々が……  
皆々「遺恨の太刀先受けて見よ。



ト切つてかゝる。大野方はあわて騒ぎ、すぐ逃げて入る。片桐方追うて入る。

トこれより床の淨瑠璃になる。

淨「晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬頻りに嘶いて行人出づ。はや別れ行く横雲や、残んの星を一つづゝ、鐘が消しゆくいなめの、長良堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き淀川みづ。

主膳、正

片桐且元の弟

貞隆。

茨木

攝津國三島郡。

片桐氏の封地。

長門守

木村重成。

三右衛門

今村三右衛門。

且元の家臣。

トよき頃に道具幕を切つて落すと長良堤の體。こゝに平舞臺上手よき處に、市、正床几に腰を掛け、その後に乗馬に馬丁二人附添ひ控へ居り、下手よき處に主膳、正つくばひ、その下手後に家來大勢控へて居る。

市「討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫に従ひ、茨木へ落去とは決せしもののお家の後事を長門守に託し置きたく、先刻竊かに三右衛門を木村が邸へ走らせたり。我はこれにて返事を待たん。御身は我に代り手勢を差配し、一足先へ參らるべし。

主「仰ではござりますれど、油斷ならざる折柄、只御一人此處に御座あらんは心もとなし。

市「いや、それはいらぬ遠慮。我等が警護は、豫て清藏等に申し含め置いたれば、氣遣なし。

……ト向うを見て

おゝ、あの人影は。

淨「詞のうちに遙かに足音。

ト此の時今村三右衛門揚幕より急ぎ足にて出で來り、すぐに本舞臺へ來て、

今「はつ、申し上げます。長門様にはおつつけこれへ。

市「大儀々々。然らば弟、御身は先へ參られよ。その方も共に。

ト今村へこなし。これにて主膳、正は一同へこなしあつて、市、正に會釋し、皆々を引連れ、二重に上りて上手へ入る。

清藏  
本村氏。且元  
の家臣。



淨「顔見合せて是非なくも、主膳を先に一同は、心残して行過ぐる。淨「後には何か一思案、寂然として駒立つる、長良堤のありあけがた、見る目も暗しをちかたに、おぼろくと現るゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として一棟高く聳えしは、

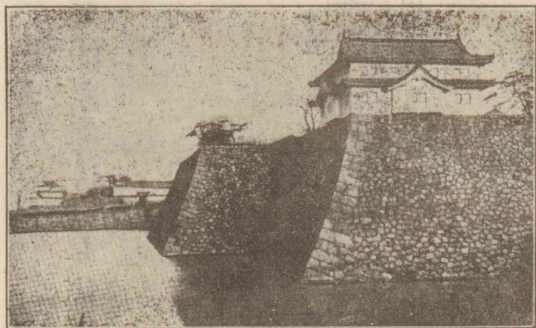
ト此の文句の間に、市、正は馬に乗りて二重に上り、向うを見ることあり。

市「おゝ、あれこそは御天守ぢやなあ。

ト向うを見て宜しく思入れ。

南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程も無きに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

故殿下  
豊太閤。



城 阪 大

淨「言ひかけて聲曇らせ、こらへず馬より飛下り、

ト文句の通り。

これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の罫に罹つて、御遺言に戻り奉る今日の仕合。不忠ともいひがひなしとも思召されん。それを思へばこの腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お赦しなされて下さりませ。

淨「人目なければ稍暫し、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心づき、われながら不覺の至。大罪の御詫よりも、さしかゝるお家の安危……長門守にはいかにせしか。はて心もとなき……

ト言ひつゝ、馬を二重上手物陰へ引行きて繫ぐ。

淨「すかし眺むる折こそあれ、残霧つんぎき一散に、走せ來る木村長門守。



ト向う揚幕より長門守馬に乗りて駈出で來り、本舞臺の方をすかし見て、  
木「市正殿に候な。」

市「長門殿待兼ねしぞ。」

ト二重をおりる。

淨「言ふ間に驅寄る轡づら、右手におり立ち顔見合せ、詞はなくてそぞろにも、まづ袖濡る、朝露や。」

ト木村馬より下立ちながら、且元と顔を見合せ、暫く無言にて落涙のこなし。頓て下手の柳の木へ馬を繋ぎて、舞臺の中央に進み、市正と向ひ合ふ。

木「最早豊臣の御社稷も愈々末となつたるか。棟梁と頼む貴殿まで、佞人、讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。」

御母公

秀頼の生母淀君。

ト愁の思入ありて、市正は傍の木に、重成はよろしくその下手に踞みて、

それがし圖らぬことよりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出

織田入道  
常眞、俗名信雄。

渡邊  
内蔵介。



長良堤の別訣 (劇の舞臺面)

仕を遠慮のその間に、思ひ掛けぬ珍變あり。ついで貴殿に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論涌くが如く、織田入道殿日頃に似げなく、激論の末、席を蹴立て唯今退座ありしとばかり。後は亂脈、無法の評定。御母公の威を笠に着る大野渡邊等が我意暴慢。この上はかれ等を一刀に切つて捨て、腹搔つ切らんと再びまで、刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を、思ひいだして無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言甲斐なさ。

淨「悔むを且元押しなだめ、



市「いしくも堪忍せられしぞや。かねてもしばく、申せし如く、お家の大仇は彼等にあらす。鼠輩のために命を捨つるは、大忠臣の所爲にあらじ。大切なるはお家の後事。某退去のこと關東に聞えなば、大亂破裂せんは目前なり。此の上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。

木「して籠城の計畫とは、何をもつて先とすべきか。

市「されば今御城に、兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置いたり。

木「してその智謀の將と申すは。

市「今九度山くやまに隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、先年お身方と爲し置いたり。合戦の驅引は一切かの仁に任せられよ。

九度山  
紀伊國伊都郡  
の町。高野山  
の北谷に當る。

木「して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。

市「その儀も豫て地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山より、材木あまた伐出させ、お船入に積みおいたり。まつた湊口の御藏には、年頃力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に涉るといふとも、尙支ふるに餘りあるべし。

木「之に加へて故殿が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御費用嵩むといへども、尙そこばくの餘財あり。

市「甲冑、兵具も乏しからず。

木「城は名に負ふ南山不落。

市「忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立籠り、偏に君家を守護するときんば……

木「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ諸大名を懐け、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻寄すとも……



速見 通稱出來丸。夏の陣に戦死、年十五。  
御宿 正倫。又武田政友に作る。  
和久 名は宗豊、通稱又兵衛。夏の陣に戦死、年八十一。

市「中々三年四年が程には、攻落さんこと難かるべし。」

木「まつた若年には候へども、愈軍始まりなば、我又一方を承り、速見御

宿しゆく和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹

きひるがへさん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一に

し、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關

東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に従ひ、この事君に

言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市、正どの。

市「ほ、頼もし、く。只大切は上下の一致、必ず忠勤はげまれよ……

……とはいひながら往時いんじに照らし、成行く末をかんがみれば……

木「御母公の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市「上、御發明に渡らせらるれど……」

木「讒佞これを覆ふが故……」

市「地の利はあれども人の和なく……」

木「故太閤が御威武に、をの、き震ひ打伏せし、六十餘州の民草も……」

市「天の時にや大御所の、自らおのづかなる徳風に、いつしか靡く世の有様。」

木「いかなれば斯くまでに、御運傾く西天の……」

トこの内あちこちにて雞の聲。市「正落ちかゝれる月を見やりて、

市「有明の影うすれつ、……」

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは……」

市「新日東天に昇るといふ……」

木「世の成行の……」

兩「影なるか。」

淨「是非もなき世の有様と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、

夜はほのく、と明けにけり。」

ト此の時鐘の音聞ゆる。夜明の心。尙處々に雞の聲。

市「後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ残すことも無し。」

大御所  
徳川家康。



木「して貴殿には是よりして……」

市「居城茨木へ一まづ立越え……」

木「と仰あるは受取り難し。もしもやこれが今生の……」

市「あゝいや、潔き最期をだに遂ぐべき機会を失ひし市、正が命の拙さ、

御詫の名こそ立ため、償ひ難き身の大罪、この身一つをとやかくと、

千筋に迷ふ心の中。(言ひかけて氣を換へ)いやなに、心ばかりはこの

後とても、君の御影に附添ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去

りなんその時には……」

木「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出奉公納め、

關東勢が眞中に、縦横無盡の血戦なし、華々しく討死なさん。

市「おゝ勇ましゝ、潔し。某長らへ世にあらば、その目覺しき働をば、餘

所ながら見物なさん。尙再會は黄泉にて。

木「さやうござらば市、正どの。」

市「随分堅固で……」

木「貴殿にも……」

淨「惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば、黄蘗は蜜にや似た

るらん。駒引寄せて式退や、見返りがちに乗りうつる、秋さび月毛乗

る人の、心やいかに片手綱。

トこの内木村は柳の木に立寄りて、馬の紐を解く。市、正は鐵扇を開きて、

二重の上手へ合圖をする。

ト本村清藏二重の上手より以前の馬を引きて出で、平舞臺へ下りる。こ

れにて市、正も木村も馬に乗る。

市「さらば。

木「さらば。

淨「と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろく、嘶く駒の聲はし

て、此の世に残す面影は、また見ぬかたとぞなりにける。



トこの内市、正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互に見返ることよろしく。幕「桐一葉」

## 二〇 信長の家庭と光秀の家庭 福本日南

福本日南  
文章家。名は誠。福岡縣の人。大正十年歿、年六十五。

戰國時代は亂暴な時代で、結婚も父兄に依つて政略的に行はれたもので、中にも大小名から以上の家庭に政略結婚が盛でした。殊に信長に至つては、最も代表的に政略觀を發揮いたしました。一代の英雄信長の眼中、只政略あるのみと謂つてもよい程で、夫人を迎へるにも、先づ自己の政略から、當時の美濃の豪族齋藤道三の娘を選びました。そして自分の權勢の伸びるに連れて、齋藤家を亡ぼさうと企てました。其の日常生活では、何時までも夫人を遠ざけて置き、深更に夫人の寢靜まるのを待つて火の見櫓に上り、齋藤家の家臣が裏切の合圖に烽火を揚げるのを見詰めてゐたといふ位でした。

淺井長政  
近江小谷の城主。二十九歳で信長に亡ぼされた。

それ故、家庭には何の和樂もなく、反つて夫人を犠牲にして齋藤家を亡ぼしました。

柴田勝家

天正十一年、秀吉のために北の莊城（福井）を陥れられ夫人と共に自殺した。勝家五十四歳。夫人三十七歳。



織田信長

たけれども。

彼の淀君として有名な茶々姫なども、信長・小谷の方兄妹の血を引き、感化を受けた人です。淀君は一面偉い所もありましたが、かなり



淺井長政の長女で小谷の方の出。元和元年大阪城内に自刃、年四十九(又三十九、或は四十五等異説が多い)。

評判の悪い人でした。此の事は世間に著聞するところで、今更申すまでもありません。一般の史家が、淀君は三十九歳で死んだと言つて居ますが、考證に據ると、四十七八歳であつたかと思はれます。然るに之を三十九歳としたのは、傾國の美人であつただけ、末路の悲劇を修飾する爲に、年齢を若くしたものでせう。それだけに、其の性行に就いては疑はしいものが多かつたことと思ひます。

織田氏の家庭に較べると、明智氏の家庭は實に見上げたものでした。主君信長を弑した故を以て、史家によつては之を逆臣傳の中に入れて居る者もありますが、是は少し考へものだと思ひます。戦國の世は、自分の好きな君臣を互に選び合つた時代で、其の主従關係は今日の政黨に於けるやうなものでした。今日の政黨の首領と黨員との關係は、當時の主従のそれのやうなものであります。此の點から見ても、光秀の反逆の理由は認めることが出來ると思ひます。世

一豪族  
丹波八上城主  
波多野秀治。

朝倉  
義景。信長に  
亡ぼされた。

間にも能く知られて居る通り、光秀の殺意を生じたのは、一に繋つて信長の横暴不遜にあつたのです。光秀が自分の母を人質にしてまで丹波の一豪族を助けようとしたにも拘らず、信長が之を顧みなかつたので、遂に母の仇として彼を亡ぼさうとするに至つたのであります。

加之、明智氏夫妻の生活には、彼が根からの悪人でも逆臣でもなかつたことを證據立てるものがあります。今少し許り挿話を物語りますと、衣食の爲に越前朝倉氏に仕へて居た光秀が、三十八歳の時大晦日の晩、朝賀の仕度にと鏡に向つて鬚を剃つてみた時、端なくも鬚の毛の中に二三本の白髪<sup>しらげ</sup>の交つて居るのに氣が附きました。光秀ははつとして、五斗米<sup>ごとうまい</sup>の爲に既に白髪に垂んとする自分の意氣地なさを恥ぢ、致仕することに決めまして、之を夫人に打明けました。夫人も名族の出だけあつて、夫の志を察し、古道具屋を呼んで、家具、家財



を始末して、早速引揚げたといふことであります。其の時迎年の準備に搦いてあつた餅の處分には、流石の明智夫人も迷はれたと見え、之を光秀に謀りますと、御歳暮に同僚の者に頒けてやつたらといふことだつたさうです。

それから暫くの間光秀は浪人生活を送つて、かなりな辛酸を嘗めました。而も貧窮の極に達してゐたある日のこと、三人の來客がありましたして、談偶興に入り、客は夢中になつて食事時を過しました。光秀は勝手元もとに居る夫人と目を見合せて、差めるに物なきことを歎きました。すると間もなく、夫人は何處からか時のものの酒肴を調へて來ましたが、何故か、夫人は酒間の周旋にも姉様冠りの手拭を取りませんでした。宴果てて後、光秀は何處から金を工面して來たのかと訊きましたが、夫人は笑つて答へなかつた。又光秀は酒間の周旋に何故手拭

之也

光秀筆蹟

を取らなかつたのかと訊きました。夫人は又笑つて何とも答へなかつたが、手拭を外した姿を見ると、丈なす黒髪は、惜し氣もなく、根元から切られておました。

もと光秀の妻は絶世の美人と謳はれた人であつただけに、今此の爲體を見た光秀は、餘計に黯然となりました。そして、たとひ志を得て天下を取るとも、侍女妾婦の輩は近づけぬといふ起請文を書いて夫人に與へました。其の日の來客は、光秀が出世の好い音信を齎した人々であつたのです。

近江の辛崎の松が枯れて、それを光秀が植換へたことがあります。光秀は其の時、松に寄せて夫人に對する愛情を歌つてゐます。逸話はまだ澤山ありますが、夫妻の愛情の密であつたことは、到底織田氏夫妻の比ではありません。斯ういふ人が徒な弑虐を好むものとはどうしても思はれません。従つて其の感化は子女の上にまで及ん

光秀の歌  
我ならで誰か  
はうゑん一つ  
松心して吹け  
志賀の浦風。



で、一門の子弟は歴史の上に光つてゐます。

今、織田家に於ける淀君に好對照を爲す人を挙げますと、彼の細川忠興夫人の如き、光秀夫妻の優れた素質と感化とを承繼いてゐると謂つて宜しい。夫人は十六歳で忠興に嫁した人です。細川家では、當時光秀の聲望が高かつたから、随分大切にしました。越えて三年、光秀の叛逆事件が起るや、罪三族に及ぶの故を以て、忠興は之を丹後の三子野の山中に流謫同然の取扱をしなければなりません。まだ二十歳といふうら若い身を、三子野の山中に狐猿を友として三年の間暮らした忠興夫人は、侍女と共に佛教の研究三昧に入り、其の蘊奥を極めました。日本西教史の上に伽羅奢姫として異彩を放つたのはそれより後のことでした。

當時の日本の基督教信者で、黒田如水や信長などにまで感化を與へた人に、高山右近といふ者がありました。忠興の口から右近の噂

伽羅奢

英語の Grace に當るクリスチャン・ネイムの Gracia のこと。

黒田如水

秀吉・家康を輔けた名將孝高のこと。信者となつてシメオ・サンプソンと號した。慶長九年歿、年五十九。

高山右近

元信長の臣。信長歿後、秀吉の先鋒となり、光秀を山崎に破つて功があつた。慶長の末、邪宗信者と云ふ廉でマニラに流された。

などを聞いて居た夫人は、自分の宗教上の疑義を質す爲に、基督教徒に會つて見たいと思つて居た。當時大阪には宣教師の造つた教會があつた。天正十五年七月、丁度盆の日に、幽囚の身ながら、忠興夫人は微行で大阪の教會を訪問しました。そして立所に宗教上の大疑團をさらけ出して、洗禮まで受けようとするに至つたのですが、夫人を追跡して來た細川家の家臣等が門前に殺到したので、遂に果しませんでした。ところが、夫人と共に此の教を學んだマリヤといふ侍女があつて、夫人は此のマリヤの手を経て遂に洗禮を受けました。そして自分の家に五人の宣教師を雇ひ入れて傳道をさせ、又躬ら孤兒院を建てたりしました。

一外人の著した日本宗教史に據りますと、忠興夫人は羅典葡萄牙の二つの國語に精通して居たとのことですが、文祿慶長頃の幽囚の身の一婦人にして此の事があるのは、今日の時代に於て英語をすら



碌に學び得ない男女をして正に顔色なからしむるものではありま  
すまいか。況して其の徳操に秀でてゐた點に於てをやです。  
此の外伽羅奢姫に就いても尙多くの語るべきことはありますが、  
要するに、織田明智兩氏の家庭の比較は、吾々に考慮すべき何等かの  
教訓を物語つて居るものと斷言して差支ないのであります。

二一 妹に諭す

吉田松陰

吉田松陰  
幕末の志士。  
名は矩方、通  
稱寅次郎。長  
門國萩藩士。  
安政六年歿。  
年三十。  
妹  
松陰の長妹千  
代子。此の文  
は安政六年四  
月十三日松陰  
が萩の野山の  
獄から千代子  
に與へたもの。

この間は御文下され、觀音様の御洗米三日の精進にて戴き候  
やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進潔齋などは隨  
分心のかたまり候ものにて、宜しきことと存候に付、拙者も二月  
二十五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ  
申さず候。その間一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御  
座候。まして三日の精進はさまでむつかしきことにもこれな

靈神様  
松陰の實家杉  
氏の祖先の靈。

法華經  
佛敎經典の名、  
妙法蓮華經。  
一部八卷二十  
八品ある。普  
門品はその第  
二十五。  
ちんぢ  
長州の方言、  
微塵の意。  
江戸の人屋  
傳馬町の獄。

く、御深切のことに候へば、相果したく存候へども、當所にては、當  
り前の精進の外にまた精進と申候ては、連中または番人ども何  
故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候こと面倒に存候  
故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に戴き申候。  
抑、「觀音様信仰せよ」とのことは、定めし禍をよけ候ためなる  
べく、これは大いに論のあることに候へば、委細申進ずべく候。  
法華經の普門品と申すに、觀音力と申すこと高大に述べてこ  
れあり候。大意は、觀音を念じ候はば、繩目に懸り候ても忽ち繩  
がぶつくと切れ、人屋に捕はれ候ても忽ち錠鍵が外れ、首の座  
に直り候ても忽ち刀がちんぢに折るゝなどと申してこれあり  
候。これは、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて  
見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難きこ  
とはなしとして信仰するも無理はなく候。



さりながら、佛の教は奇妙なる仕掛にて、大乘・小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは、一心に有難いことぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこのことなり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候てもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故、世の中にいかに難題苦患の來るとも、それに退轉して、不忠・不孝・無禮・無道など仕る氣遣はなし。されど、初より凡夫に一心不亂の、不退轉のと申聞かせても、少しも耳に入らぬものゆゑに、假に觀音様を拵へて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。さてまた、大乘と申す方にては、出世法と申すことが肝要に御

座候。出世と申候ても、立身出世などと申すことにては御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひしところ、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往先は老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往先は死なんかと悲しみ、蟲



吉田松自畫自贊

けらの死にたる、  
草木の枯れたる  
までに悲を發し、  
生老病死がこの  
世の習なれば、是

非にこの世を出ねば濟まずと志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候て、三十出山とて、僅か五年の間に、生老病死を免るゝことを悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬことを悟つて出

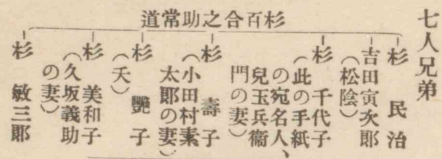


て来て、それより世の人々を教化せられたり。これが即ち出世法と申すものなり。故に出世せねば濟世の出来ぬと申すもこのことなり。濟世といふは即ちこの世の人を濟度することに御座候。

さて、その死なずと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば有難がりもし恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し。」といふことを御悟りあるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。

塞翁が馬  
淮南子の人間  
訓に出てゐる  
故事。



拙者など人屋にて死ぬることに候へば、禍のやうには候へども、また一方には學問も出来、己のため人のため、後の世へも残り、かつ死なぬ人々の仲間入も出来候へば、福の上もなきことに候。人屋を出て候はば、またいかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の效驗もなきことに、觀音に頼みて福を求むるやうのことは、必ず無益に存候。

尤も右の如く申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存じあるべきか。こゝにまた論あり。易の道は満盈と申すことを大いに嫌ふなり。お互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふさまの悪きやうなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様、そもじ小田村は、兩人つつも子供があれば、不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を



見較べよ。これほどにも参らぬ家の多きものぞ。近くはそも  
 じの家にも、高須などにも、兄弟の中には悪き人も随分ある  
 なり。然れば、父母兄弟の代りに、拙者、艶敏の三人が禍を受くる  
 にこそと思ひ候はば、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。  
 且、杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣  
 遣なるものなり。拙者身の上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死  
 しても死なぬ仲間なれば、後生の福は随分あれど、杉は今にては  
 御父子とも御役にて、何の不足もなき中なれば、子供等がいつも  
 このやうなるものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞  
 なされたることを話して聞かせても、眞とは思はぬほどなれば、  
 この先五十年七十年の事を篤と手を組んで案じて見られよ、氣  
 遣なるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめ  
 であし〜と嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にて

御役

常道は治獄吏、  
民治は藩學助

山宅

杉常道隠棲の  
地、萩城の東  
方護國山の麓  
にあつた。

小太郎  
民治の子。

たまらぬ故、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては、獨り落涙  
 したるほどのことなりき。若しや萬一、小太郎が父祖に似ぬや  
 うになることあらば、杉の家も危し〜。父様母様の御苦勞を  
 知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にて、すら山  
 宅のことはよくは覺えて居るまじ。まして久坂などはなほ以  
 てのこと。されば、拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥  
 姪の間に、樂は苦の種、福は禍の本。と申すことを篤と申聞かす  
 る方が肝要なり。なほまた一つ、拙者不孝ながらも孝に當るこ  
 とあり。兄弟の中に一人にてもふざまの悪き人あれば、あとの  
 兄弟は自然と心が和ぎて、孝行するやうになり、兄弟も睦しくな  
 るものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合  
 ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父様母様へ孝行してくるゝがよ  
 し。さすれば、つゝまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父様母



様の御仕合、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれほどめでたきことはなきにあらずや。よく御勘辨候て、小田村久坂なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に、  
のどけさよ願なき身の神まうて  
神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。〔俗簡襍輯〕

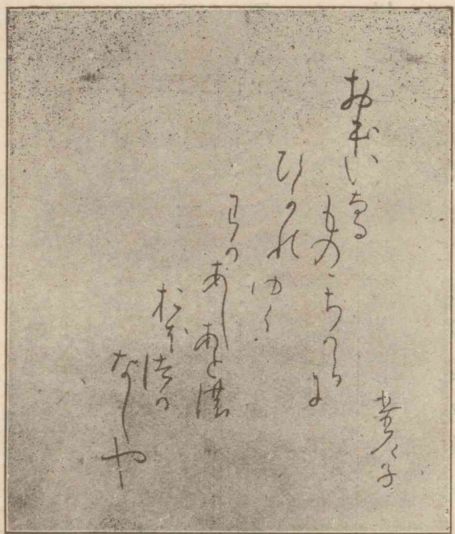
二二 無憂華

九條 武子

九條武子  
歌人、東京眞  
宗婦人會長。  
明治二十年京  
都市生。

女の涙は美しい。それはつめたい客觀の世界から離れて、極みな  
き愛の泉よりしたゝり來る純情の一滴である。  
しかし多くの女子は、之を自己の遊戯として弄ばうとする。そし  
ていはゆる「涙の征服」がつひに「涙の陥穽」となることに心づかない。

世に不良兒を救ひ上げた慈母の涙よりも、自己を偽つた技巧の涙が  
多いのは悲しいことである。  
女子は涙そのものを卑しいものにしてはならぬ。むしろ涙によ



九條武子筆蹟

つて象徴されるつゝ、ましき純情の、男子よりも多分に恵まれてゐることを讚美せねばならぬ。

二

女性は弱きものとされてゐる。女性に對する幾多の同情が發せられるのはこの故である。しかし世の婦人を論ずる士に通有な誤謬は、女性は先天的に弱者であるといふ前提に立つて見てゐることである。女性は本來決



して弱者ではない。だが女性が知らず／＼男子の同情を要求してゐる間は、弱者に甘んぜざるを得ないであらう。すべて同情は求めべきものではなく、互に與へられるところに眞義があるのである。なげかざれをみな心のさびしさはをみな心のそのつよさより

三

幼児が母の懷に抱かれて、乳房を含んでゐるときは、すこしの恐怖をも感じない。すべてを託し切つて、何の不安をも感じないほど、母性愛のめぐみが遍満してゐるのである。

いだかれてあるとも知らずおろかにもわれ反抗す大いなる手に

而も多くの人々は、何故に自ら悩み、自ら悲しむのであらう。救の光の中に我等もまた、幼児の素純な心をもつて、安らかに生きたい念

願をもつ。めぐみの中に凡てを託し得るは、美しき信の世界である。

四

吾々はせめて、與へられた日々の糧の前に坐つた時だけでも、沁々とした心をもつて、箸を取り上げたいと思ふ。一尾の魚に對してさへ、念佛して酬いられた親鸞上人の心持も、おのづから窺はれる。

一碗の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさゝげられたものであると思へば、合掌せずにはゐられない親しさ、涙ぐましさを感じる。

吾々は天の恵と、地の福と、人の働きとを讃仰しよう。恵をたえず求めて已まぬのは、しほらしいことである。しかし常凡な現實の中にも、ゆたかな恵を見遁してゐるのは寂しいことである。

五

心に願ふすべてのものに恵まれてゐても、心から信じ、許し合ふまことの友は得難い。



互に信じ合ふことの出来るのは、互の人格を敬愛し合ふからである。互の人格を信じ、心から許し合ふことの出来るのは、同じ信念の世界に限なき愉悅を抱きつゝ、俱に歩んでゐるからである。

しかし今日の社交と名づけられるものが、單なる追従と美辭の交換とに過ぎないのは悲しいことである。花を見て花の心に觸れぬこの寂しさの中に、見出したまことの友こそ、何に増しても尊いものである。

六

人間は誰しも正義を愛する。しかし何人も、正義の聲を聴き得る心をもつてゐても、自ら之を行ふところがなかつたならば、それは正義を愛する人ではない。

ことごとくが不正不義の中に、たゞ一人正義を守つてゆく人は尊い。しかし他の不正不義を顧みるところがなかつたならば、それは

正義を擁護する人ではない。

自らも行ひ、人も行ふ。正義はそこに恆久不滅である。ゆゑによき人のをしへを慕ひ、正しき道のさとりを悦ぶ人は、また、よきをしへの擁護者であらねばならぬ。

七

美は人間の理想生活を形づくる最大の要素である。何人も美を求めてやまぬところに、完全性への憬れに燃える人生が窺はれる。

自然の姿が常住に、平明に、そして純粹の美しさを示してゐるのは、意志を交へた偽瞞の醜さが無いからである。この故に粉飾された笑みよりも、寧ろ卒直な憤が美しいと思はれる場合がある。

何人も生活を美に導くことは大切なことである。自己にのみ恵まれた美を見出して、完全にこれを育くんでゆくとときに、美は一步を高めて、聖にまで至ることが出来る。



八

インスピレーション  
靈感。

異郷に在つて故郷訛を聞いたときは、未知の人にさへも聲を掛け  
たくなる。故郷の強きインスピレーションは、それほどわれらの心  
を抱擁してゐる。

何の奇もない山にも水にも、われらの祖先がこゝの土に育ち、その  
榮えを願つて働いて來たことを思へば、何か知らず生命のこもつた  
なつしき、安らかさが感じられる。

候鳥のさすらひに似た生活を送つてゐる何人も、所詮還るべき故  
郷の土を忘れ得ない。何人も慕はしき心地をもつて土に還つてゆ  
く。故郷に對する慕はしさの與へる最終の慰安は死である。

九

追憶は永久に若さと新しさをもつてゐる。或時はほゝ笑まし  
き慰めとなり、或時は用心深き戒をこめて、常に過ぎし日を蘇らせる。

勿論、追憶に耽ることによつてのみ、慰安を貪るのは愚痴である。  
が、近代人は知らぬ未來を逐ふことにのみ心惹かれて、自らの辿つて  
來た懐かしき過去に、何等の感激を見出ださうともしない。

追憶を通じて過ぎた自分を眺めるとき、自己の過去が無爲に消え  
てしまつたのではなく、却つて慕はしく、しみじみと人生の深みその  
ものに觸れてゆくなつかしさを感ずるのである。この故に、追憶の  
感激を持たない生活を續けてゐる人は寂しい。

一〇

習慣を根柢から打破しようとする企は、われらの現に把持する文  
化を破壊せんとする暴舉に等しい。

習慣は既にわれらの生活と、不可分の要素となつてゐることによ  
つて、われらの存在も決して一時的でないことを自覺させられる。  
と同時にわれらの世界は、先人の絶えざる努力によつて、こゝまで築



き上げられたものであることを考へさせられる。  
この故に、一も二もなく習慣を一蹴し去る者には、決してゆたかな  
未來は恵まれない。われらは過去といふたしかな事實から逃れ得  
ない以上、無始無終の生命への精進は、三世の因果を信ずる者に於て  
始めて可能である。

二三 光あれ

姉崎 正治

姉崎正治  
宗教哲學者。  
文學博士。東  
京帝國大學教  
授。號は嘲風。  
明治六年京都  
市生。

人間はあまり此の世界に慣れすぎた。何物も今ある如く昔から  
存し、萬事總べて成行のまゝになるものとして敢へて怪しまず、その  
日その日を過す。

兒童は世界新來の客として、驚異の眼を瞠つて事々に疑問を起し、  
何物に對しても起原或は聯絡の説明を求め、それが次第に世に  
慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をも起さず、好奇心をも動かさな

くなる。然るに若し人あつて、俄に此の世に生れ、而も成熟した心を  
以て四圍の世界を觀、人世の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚  
歎の種となり、疑問の材料となるに違ない。

その疑問に對して、今日の科學はそれ／＼説明を與へはするが、さ  
て萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふより外はない。進  
化論で説明しても、其の至極の始は、終に混沌の闇に入らざるを得な  
い。此に於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造する始と  
いふ事を想はしめる。ユダヤの神話、創世記の開卷は、此の想像を述  
べて曰く、

始に神天地を造り給へり。地は形なく空しくして、闇淵の面  
にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。

萬有渾沌として、天地は一の闇の中に閉ぢられ、水とも雲とも分か  
ぬ濛氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ、闇の中に「神光あれ」と宣ひけ

創世記  
舊約全書の中、  
モーセ五經と  
稱せられるも  
のの一つ。ユ  
ダヤ民族間に  
傳はつた創世  
の事實を記し  
たもの。



れば、光ありき。神、光と闇とを分ち給へり。夕あり、朝ありき、これ首はじめの日なり。」

嗚呼、此の一言ほど有力な、又不思議な言葉が他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に互るべき晝夜の區別が出来た。それから、神が「水あれ。」と言へば、水が出来、天の大空と地の大海とが二つに別れ、又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が其の聲に應じて生ずる。かくして天地と萬物とが成立つたと云ふ。

此は神話であり、想像である。従つて萬物成立の説明としては我の理性には合はない。併し理性的説明のみが、唯一の解釋であるとはいへず、又宇宙の始のみが「光あれ。」の言に發したとする必要もない。此の如き創造の事實は我々の生活に於て日々に經驗し得ることではなからうか。

人の心は物に引かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に隨つて推移して止まる所を知らず、見る物、聞く事、一として全然自分で支配し得るといふものはない。其の上思ふ事、欲する所も、變轉もすれば突發もする。由つて來る所を知らず、落着く先も自分ながら測り得ない。意馬は隠見し、心猿は跳梁する。若し自然に任せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外なく、唯現在刹那の意識は明らかでも、其の前後左右は混沌の大溟に没する外ない。然るにそこに何か心を統御するに足る觀念が浮かび、又は精神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念、理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝ぼらけに目がさめる。此の如き精神の靈感は、聲こそなければ、實に「光あれ。」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬心猿の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命あるコスモスとなる。かく觀じ來れば、創世記の

コスモス  
宇宙。



空想は單に世界萬物の始を説いたものでなく、刹那々の我等が心にも起るべき大創造を描き、我々各自の心靈が發揮し得べき原始の事實を示したものと思はれる。

浮世の紛々に心亂れ氣濁つた時、我が心に斯くすべしとの決斷を得たならば、是世務の混沌を照らす光ではないか。天然萬象を研究し、難題疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて眞理の光明に逢着するも、亦「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又藝術家が天然人事の中に美の靈を捕へ得て、畫帖の上に又は木石の中に、之を表現する時、「光あれ」の創造力を示すではないか。音樂家が天來の音に心耳を澄まして之を樂譜に捕へるのも、詩人が靈感を歌ひ出すのも、亦「光あれ」の一聲混沌の世界を破るに等しいものがあるであらう。

精神の創造力、是いつまでも、正體の捕はれない不思議であるが、而

もまた實に人生に於ける高き貴きゆかしき生命の源泉である。萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、智慧の光で無明の暗を破り、慈悲の暖かみに煩惱の氷をも解かす。攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば人生始つて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の生にも永遠の生命を實にし得た人にして、其の信念開發の大事に際して、混沌の闇の中に「光あれ」の言に接した思をなさなかつた者が、果してあるであらうか。信念の力は此にある。人生の價値は實に此の如き光明の新生命が齎すのである。大死一番を経た大悟徹底、悲痛煩悶の底



に陥つた後の信心開發、罪を悔いて罪の己を殺し得た精神の復活蘇生、言葉は異なり、方面は違つても、混沌を破る新光明を得たといふ靈の感化に至つては一つであらう。

「光あれ。」是單に太初の創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活あり、理想の力が現れる處には「光あれ」の御言が常に聞え、其の不思議の創造力が絶えず躍動しつゝあるのである。

〔光あれ〕

### 二四 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父

高山樗牛  
文藝批評家。  
文學博士。名  
は林次郎。山  
形縣の人。明  
治三十五年  
歿。年三十二。



釋 迦

竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多

は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九歳其の妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欣びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この



間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定



(筆幽探野狩) 孔子像

公の時に至り擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子

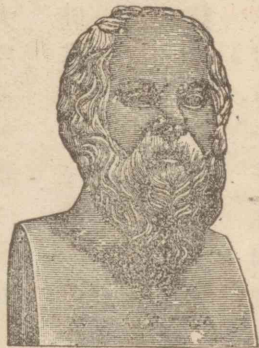
にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知るものなきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを疾む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と、幾ばくもなくして歿しぬ。時に年七十三。

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の

天を怨みず  
論語、憲問篇、  
及び衛靈公篇。



生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出てたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道德は空文の上のみ貴ばれたり。其の状なほ釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。然るに「喬木は風に折らる。」の喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。



ステラクソ

其の訴狀に曰く「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を靱め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。」と、ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟を集めて生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にと知らずや。」と終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く「爾一鶏を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と、蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは此の如くにして逝きぬ。年七十。

アスクレピオス  
醫術の神。



基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西曆紀元第一年は其の生後四年に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名はマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネ



トスリキ

の洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜してますます、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黒

の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等これを喜ばず、猥りに新法異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く「神よ彼等を救せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く「イエルサレムの女子よ我が爲に哭く勿れ。唯己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くにして基督は三十三年を一期として十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永



く後人の敬慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を除きては、いづれも轆轤不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に逢うて揚言して曰く「正義を信ずるものに取りて死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか。其の一日即ち國民の迷を覺さざるべからず。」と。基督は己を罪に陥る

るもののために神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。夫人生は苦に始りて苦に終る。生老病死いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義父子の親夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れながらにして

身を修め  
古之欲明明  
德於天下者  
先治其國欲  
治其國者  
先齊其家欲  
齊其家者  
先修其身欲  
修其身者  
先正其心欲  
正其心者  
先誠其意  
(大學)



美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てあり。既に教育を受けて身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて、治國平天下に終るものと見るべし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると、行うて知らざるとは共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中に在り。」と。

山上の垂訓  
新約全書、馬  
太傳。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。

曰く「心の貧しき者は福なるかな。天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな。其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな。其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな。其の人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな。其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。汝等施をするとき、右の手の爲す所を左の手に知らしむるなかれ。隠れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人は是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁



木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。門を叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、これより入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、其の路を得る者の少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。基督教の精髓は後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓を出でず。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆はこの教に憑りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること、何を以て是に比せんや。〔樗牛全集〕

### 自修文

#### 一 出家と其の弟子

倉田百三

倉田百三  
 創作家。明治  
 二十四年廣島  
 縣生。

場所 西の洞院御坊。

本堂の下手にあたる僧の控へ間。高殿になつて居て京の街を望む。直ぐ下に通路あり。通行人あり。

人物 親鸞 七十五歳 松若改め唯圓 十五歳 僧三人。其の他  
 時 秋の午後。

今日  
 法然上人の法  
 會の日。

僧一「今日の法話はどなたがなされるので御座いますか。」

僧二「私が致す筈になつて居ます。」

僧三「どの様な事に就いてお話しなさるお積りですか。」

僧二「法悦といふことに就いて話さうと考へて居ます。佛の救を信する者の感ずる喜ですな。經に所謂踴躍歡喜の情ですな。富も要らぬ、名譽も欲



しくない、私にはそれよりも楽しい法の悦があります。その悦があればこそ此の年まで墨染の衣を着て、貧しく暮して来たのですからね。

僧一「さうですとも。私は他人の綺羅を羨む氣はありません。私は心に目に見えぬ錦を着て居ると信じて居りますから。

僧二「私は今日話さうと思ひます。皆様は此の法悦の味を知つて居ますか。

若し此の味を知らないならば、假令皆さんは無量の富を積んで居ようと、私は貧しい人であると斷言致しますと。(眉を聳やかす)

僧三「それは思ひきつた、強い宣言ですな。

僧二「若い息子や娘たち——私は言はうと思ひます。皆様は此の法悦の味を知つて居ますか。若し此の味を知らないならば、假令皆様は楽しい人生に酔はうとも、私は憐むべき人々であると斷言致します。

僧三「若い人々は耳を敬てるでせうね。

僧二「私から何でも奪つて下さい——私は言はうと思ひます。富でも名譽でも愛でも。たい併し此の法の悦だけは残して下さい。それを奪はれることは私に取つては死も同じ事です。

僧三「丁度私の言ひたいことをあなたが言つて下さるやうに、いゝ氣持がします。

僧二「私も同じ心です。其の悦が無くては、私達は實に慘めですからね、僧ほど詰らないものはありませんからね。私も其の悦で生きて居るのです。

僧一「私は、其の悦は私達の救はれて居る證據であると言はうと思ひます。私達は此の穢れた娑婆の世界には望を置かない、安養の淨土に希望を抱いて居る。私達は病氣をしても死を怖れることはない。死は私達に取つて失でなくて得である。安養の國に往いて生きるのだからである。此の様な意味の事を話さうと思ふのです。

僧三「それは皆本當です。私達信者の何人も經驗する實感です。

僧二「昔から開山達が、一生涯貧しく而も悠々として富めるが如き風があつたのは、皆心の中に此の踴躍歡喜の情があつたからだと思ひます。

僧一「唯圓殿、あなたは何を考へ込んで居られますか。

僧三「大層沈んでいらつしやいますね。



唯圓「いゝえ、只何となく氣が重いので御座います。」

僧三「その様に氣の滅入る時には、佛間に坐つて念佛を唱へて御覽なさい。明るい、冴えん、した心になります。」

唯圓「左様で御座いますか。」

僧一「大きな聲を出してお經を讀むとよう御座います。」

僧二「一つは信心の足りないせゐかも知れませんが、氣を悪くなさいますな。」

私は年寄だから言ふのですからね。だが佛様のお慈悲を戴いて居れば、何時も心が嬉しい筈ですからね。何時も希望が充ちて居なくてはなりません。また佛様の兆載永劫の御苦勞を思へば、感謝の念と衆生を憐む愛とが常に胸に溢れて居なくてはなりませんからな。法悅のないのは信心の獲得が出来て居ない證據だと思ひます。氣を悪くなさいますな。いや若い時は誰でもそんなものですよ。

僧一「おやお勤めの始る鐘が鳴つて居ます。」

僧三「本堂の方へ參らなくてはなりません。」

僧二「では御一緒に參りませう。唯圓殿は？」

唯圓「私はお師匠様のお給仕を致しますので。」

（三人の僧退場。唯圓暫く沈黙。やがて茶器を片付け、立ちあがり、廊下に出で、柱に身を倚せかけ、ほんやりして下の道路を見て居る。商家の内儀と女中と下の道路の端に登場）

内儀「今日は澤山なお参りだね。」

女中「いゝお天氣で御座いますからね。」

内儀「随分埃が立つことね。（肩を擧む）」

女中「お髪が白くなりましたよ。」

内儀「さうかい。（手巾を出して鬚を拂ふ）少し急いで歩いたものだから、汗がじつとりしたよ。（額や頸を拭く）」

女中「ほんに少し暑すぎる位でございます。」

内儀「線香に、米袋に、お花、皆ありますね。」

女中「皆ちやんと揃つて居ります。」

内儀「おやお勤めの鐘が鳴つてるよ。」

女中「丁度よい處へ參りました。」



内儀「早く本堂の方へ行きませう。(道路の向うの端に退場)

親鸞(登場) 唯圓の後に立つ。(唯圓々々)

唯圓(振向く) 親鸞を見て顔を赤くする

親鸞「そんな處で何をして居る。

唯圓「ぼんやり街を通る人を見て居りました。

親鸞「今日は好いお天氣ぢやの。

唯圓「秋にしては暑いくらゐで御座います。

親鸞「澤山な參詣ぢやの。

唯圓「はい。此處から見て居ると、色々な人が下を通ります。

(丁稚二人登場) 角帶をしめ、前垂をかけ白足袋を穿いてゐる。印の入つた葛籠を載せた車を一人が曳き、二人が押してゐる)

稚一「もつとゆつくり行かうよ。

稚二「でも遅くなると又叱られるよ。

稚一「私は草臥れた。

稚二「また昨夜の様に居睡するとやられるよ。

稚一「でも睡くて、しやうがなかつたのだもの。

稚二「随分暑いね。(手で汗を拭く)

稚一「そんなに草履をばた／＼させな。

稚二「澤山な人だね。

稚一「皆お寺参りだよ。

稚二「見せ物の看板でも見て往かうか。

稚二「一寸誘惑を感じたらしく立止る」でも遅くなると叱られるから、早く往かうよ。(退場)

親鸞「世の様々な相が見られるな。私は昔から通行人を見て居ると寂しい氣がしてな。

唯圓「私も先刻から其の様な氣がして居たのです。

親鸞「此處で暫く休んで行かうか。

唯圓「それがよろしう御座います。(座蒲團を持つて来て敷く) 今日にはよく晴れて

比叡山があのようにつきりと見えます。

親鸞「坐る」あの山には、今も澤山な修行者が居るのだがな。



唯圓「あなたも昔あの山に長くいらつしやつたのですね。」

親鸞「九つの時に始めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大抵あの山で修業したのだ。」

唯圓「その頃の事が思ひ出されませうね。」

親鸞「あの頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間に眞面目に一筋に煩悶したのだからな。森なかで靜かに考へたり、漁るやうに經典を讀んだりしたよ。また夕方など暮れて行く京の街を眺めて、あくがれる様な寂しい思ひしたものだよ。」

唯圓「では私の年には、あの山にいらしたのですね。どの様な氣持で暮して居られましたか。」

親鸞「お前の年には私は不安な氣持が次第に切迫して來た。苦しい時代だった。お經を讀んでも、私の心にしつくりとしないのだからな。それに私は其の不安を心に收めて、全然孤獨で暮さねばならなかつた。」

唯圓「同じ年輩の若い修行者が、澤山近くに居られたのではないのですか。」

親鸞「何百といふ程居たよ。恐しい荒行をする勇猛な人や、夜の目も惜しんで

研究する人や、また仙人の様に清く身を保つ人や、様々な人が居た。私も其の人々のするやうな事を後れずにした。随分思ひきつた行もした。しかし私の心の中には、其の人々には話されぬやうな寂しさがあつた。人生の愛と悲とに對するあくがれがあつた。話せば取合はれないか、或は輕蔑されるかだから、私は其の心持を一人で胸の中に守つて居た。其の寂しさは私の心の中で段々と他には知れずに育つて行つた。私が愈々山を下る前頃には、其の寂しさで破産しさうな氣がした位だつたよ。」

唯圓「お師匠様。私は此の頃何か寂しい氣がしてならないのです。時々ぼんやり致します。今日も此處に立つて通る人々を見て居たら、ひとりでの涙が出て來ました。」

親鸞（唯圓の顔を見る）「さうだらう。（間）お前は感じ易いからな。」

唯圓「何も別に是と云つて原因はないのです。しかし寂しいやうな、悲しいやうな氣がするのです。時々泣けるだけ泣きたい様な氣がするのです。永蓮殿は體が弱いせゐだらうと言はれます。私もさうだらうかとも思ふのです。けれどさうばかりでもないやうに思はれます。私は自分の



心で解りません。私は寂しくてもいゝのでせうか。

親鸞「寂しいのが本當だよ。寂しい時には寂しがるより仕方はないのだ。

唯圓「今に寂しくなくなりませうか。

親鸞「どうだかね。もつと寂しくなるかも知れないね。今はほんやり寂しい

のが、後には飢ゑるやうに寂しくなるかも知れない。

唯圓「あなたは寂しくはありませんか。

親鸞「私も寂しいのだよ。私は一生涯寂しいのだらうと思つて居る。尤も今

の私の寂しさは、お前の寂しさとは違ふがね。

唯圓「どの様に違ひますか。

親鸞「憫むやうに唯圓を見る」お前の寂しさは對象によつて癒される寂しさだが、私の寂しさはもう何物でも癒されない寂しさだ。人間の運命としての寂しさなのだ。それはお前が人生を経験して行かなくては解らない事だ。お前の今の寂しさは段々形が定まつて、中心に集注して来るよ。其の寂しさを凌いでから本當の寂しさが来るのだ、今の私の様な寂しさは。しかし斯の様な事は話したのでは解るものではない。今にお前自ら知

るやうになるよ。

唯圓「では私はどうすればいゝのでせうか。

親鸞「寂しい時は寂しがるがいゝ。運命がお前を育ててゐるのだよ。只何事も一筋の心で眞面目にやれ。ひねくれたり、ごまかしたり、自分を欺いたりしないで、自分の心の願に忠實に従へ。それだけ心得て居ればよいのだ。何が自分の心の本當の願かといふことも、すぐには解るものではない。様々な迷を自分で造り出すからな。しかし眞面目でさへあれば、それを見出す智慧が次第に磨き出されるものだ。

唯圓「あなたの仰しやる事はよく解りません。しかし私は眞面目に生きる氣です。

親鸞「うん。お前には素直な一向むきな善い素質がある。私はお前を愛してゐる。其の素質を大切にしないではない。運命に眞直に向へ。智慧は運命だけが磨き出すのだ。今はお前は年の割に幼いやうだけれど、さきでは大きくなれるよ。

唯圓「先刻私は智應殿に叱られましたな。



親鸞「何と言つて。」

唯圓「私が寂しいのは信心が足りないからだと言うて。佛様の救を信する者は法悦が無ければならぬ。其の法悦は救はれて居る證據だ。踴躍歡喜の情が胸に満ちて居れば寂しい事はない。寂しいのは救はれてない證據だと仰しやいました。」

親鸞「ふん。(考へてゐる)」

(兩人暫く沈黙。僧一僧三登場)

僧一「お師匠様は此處にいらせられましたか。」

親鸞「唯圓と日向で話してゐました。」

僧三「御氣分は如何で御座いますか。」

親鸞「もう大抵よいのだよ。有難う。」

僧一「それは嬉しう御座います。大切に遊ばして下さい。」

親鸞「お前たちも此處でお話しなさい。本堂の方はどうだつた。」

「唯圓座蒲團を持ち來り、兩人に薦め茶をつぐ。」

僧三「一杯の參詣人で御座います。お勤が濟みまして、今は智應殿の説教最中

で御座います。」

僧一「智應殿の熱心な説教には、皆感動した様で御座いました。」

僧三「權威のある、強い説教でした。皆畏まつて聽聞致して居ました。」

僧一「今日の説教は殊に上出來で御座いました。」

親鸞「やはり法悦といふ題でしたのだな。」

僧三「御存じでいらつしやいますか。」

親鸞「智應が私に話したこともあるし、さつき唯圓から一寸聞いた。」

僧一「宗教的歡喜といふものが、如何に富や名譽など、地上の樂よりも勝れて尊

いかを高調して御話なされました。」

僧三「何ものよりも楽しいとさへ仰しやいました。」

唯圓「死の恐怖もなく、孤獨の寂しさもなく、浮世への誘惑も無いと仰しやいました。」

僧一「法悦は救の證據であると言はれました。」

僧三「私達出家してゐる者の特別に恵まれた境遇であることを、あの説教を聽いて私は今更の如くに感じました。」



唯圓「私はあれを聞いて不安な氣が致します。私は此の頃は寂しい氣が何時も致します。ほんやりしてお經を讀んでも心が躍らない時があります。私は病身で先月も少し熱が高かつたので、死ぬのではないかと恐くて堪りませんでした。今死んでは惜しくてなりません。私は何だかあくがれる様な、浮世を懐かしむやうな氣が催して來ます。智應様のやうに強い證據を立てることが出來ません。法悦が救の證據とすれば、私は救はれて居ないのでせうか。私は此の様でも佛様が助けて下さることだけは疑はないのですけれど……」

僧一「體の弱いせゐだらうと私は思ひます。

僧三「やはり信心が若いからではありますまいか。

唯圓「お師匠様一體どうなので御座いませう。教へて下さい。私は不安で堪りません。私は助かつて居ますが、居ませんか。

親鸞「助かつて居ます。心配することはありません。實は私も唯圓と同じ心持で暮してゐます。病氣の時は死を怖れ、煩惱には絶えず催され、時々寂しくて堪らなくなる事もあります。踴躍歡喜の情はどうもおろそか

になりがちでな。時に燃えるやうな法悦三昧に入ることもあるが、其の高潮はやがて灰の様に散り易くてな。私は始終苦しんで居ます。

僧一「驚きて親鸞を見る」「あなたがですか。

親鸞「私はなせかうなのだらうと何時も自分を責めて居ます。よくよく私は業が深いのだ。私は老年になつてかうなのだから、若い唯圓が苦しむのも無理はない。しかし私は決して救は疑はぬのだ。佛はかねて知らしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた。其の致し方のない罪人の私等を此の儘助けて下さるのだ。

僧三「では智應殿のお考は間違で御座いますか。

親鸞「いや間違ではない。人によつて業の深淺があるのだ。法悦の相續出來る人は恵まれた人だ。私は其の様な人を祝福する。或人は煩惱が少く、或人は煩惱が強くて苦しむのだ。只法悦を救の證據とするのが淺い。智應にも話さうと思つて居るが、よくお聞きなさい、救には一切の證據はありませんぞ。其の證據を求めるのは此方の計ひで一種の自力です。救は佛様の願で成就してゐる。私等は自分の機に關らず只信じればよ



いのです。業の最も浅い人と深い人とはまるで相違した此の世の渡りやうをします。併しどちらも助かつて居るのです。

唯圓「私は有難い氣が致します。勿體ない程で御座います。」

僧一「私は其處に氣が付きませんでした。法悦があつてもなくても、私等の心の有様の變化には關りなしに、救は確立してゐるので御座いますね。」

親鸞「それでなくては運命に毀たれぬ確かな救と言はれません。私等の心の有様は運命で動かされるのだからな。」

僧三「やはり自らの功で助けられようとする自力根性が残つて居るのでね。すべてのものを佛様に返し奉ることは容易で御座いませんね。」

親鸞「何もかもお任せする素直な心になりたいものだな。」

唯圓「聞けば聞くほど深い教で御座います。」

親鸞「みんな助かつて居るのぢや。唯それに氣が附かぬのぢや。」

「出家と其の弟子」

## 二 生命の冠

山本有三

山本有三  
劇作家。本名  
勇造。明治二  
十年栃木縣生。

郵便配達夫郵便「と手紙をおいて行く。」

欽次郎（それを受取つて讀む）やあ、また値上だ。

有村 どこから來たのだ。

欽次郎 東洋製罐です。罐がまた三割値上だといふのです。

有村 弱つたな。

欽次郎 蟹は高い。罐は上る。かう何もかも高くつちやとてもやりきれやしない。兄さん、もう非常手段を講ずるより外ありませんよ。

有村 非常手段とは品を落して、どこまでもうちの持船で間に合せようといふのか。

欽次郎 さうです。さうでなかつたならとてもやつて行けやうがないぢやありませんか。昨夜も遅くまで二人で計算を立つて見たでせう。他から蟹を買つてやつた日には、何萬つて損するんですからね。その上罐が三割も値上になつたとすれや、いくら損するか分りませんよ。



有村 併し一等品といふ契約に等外品は送れないからね。

欽次郎 そんなことをいつたつて、今の場合爲方がないぢやないですか。

醫者 匹田女中に送られて奥から出て来る。

匹田 いやもう構はんでくれ。構はんで。

兄弟は醫師の言葉を聞きつけて、話をぴたりと止める。

有村 あ、先生がおいでになつてゐたのですか。少しも知りませんで。

匹田 いやお構ひ下すつては困る。時に奥さんは今日は少し熱が低いやうだ。

あの分なら心配なことはありません。

有村 いろ／＼有難うございます。

欽次郎 今日は先生は朝の御回診ですか。

匹田 いや、昨夜、そら汽船が沈没したらう。あの乗組員に病人が出来たと云つて呼びに來られたものだから、今その歸り道さ。丁度お門を通つたからお寄りしました。

有村 あ、さうですか。それはどうも御親切に。

欽次郎 汽船といへば氣の毒なことをしましたね。でも運送船とかでお客が

乗つてゐなかつたのは、せめてもの幸でした。

有村 乗組員はみんな助かつたんですか。

匹田 みんな助かつた。たゞ船長が可哀さうなことをしましたよ。

有村 どうしたのです。

匹田 船と一緒に沈んでしまつたのだ。

欽次郎 あ、船長は亡くなつたのですか。私はみんな助かつたと聞いて居りましたが。

匹田 さうです。乗組の船員すらさう思つてゐたのです。ところが後になつて、船長のゐないことが分つたのだ。

有村 どうしたのでせう。

匹田 今わたしはその話を聞いて涙をこぼしてしまひました。かうなのです。沈没した北海丸は小樽から荷を積んで浦鹽に行く船だったので。ところが途中で嵐に遭つたものだから、それを避けようと思つてこのマウカにやつて來たのです。それでテーカーの沖まで來ると、あすこいらはあの通り暗礁の多い處だ。そこを吹雪は烈しい、船は小さいと來てゐるか



ら、船員は必死となつて働いたけれども、とう／＼暗礁に乗り上げてしまつたのです。で、あつといふ間もなく、水はどん／＼船に浸入して來たので、船長はもう爲方がないから、全員甲板へ。「ポート降し方。」を命じたのです。そして全員がポートに乗移つたところが、船長だけはまだ船に残つてゐるのです。

欽次郎 あゝ、それでとう／＼船と運命を共にしてしまつたのですか。

匹田 いや、さうぢやない。話はこれからなのです。それで船長がまだ甲板に残つてゐるから、ポートに乗つた者は早く降りて來るやうに勧めたのです。すると船長は、「おい、ちよつと待つてくれ、忘れ物をした。」といつて、飛ぶやうにデッキを下へ駈下りて行つたのです。

欽次郎 ほう。

匹田 何しろ浪は逆巻く、夜は暗い。ポートに乗込んだ連中は氣が氣ぢやなかつた。併し船長は間もなく甲板に歸つて來ました。そして、「いゝか、降りるぞ。」と大聲でどなつて闇の中をする／＼降りて來たのです。そこでポートは直ぐに本船を離れて、死者狂ひに突進したのです。

有村 どうしたのです。

匹田 あとからポートに降りたのは船長ぢやなかつたのです。

欽次郎 ぢや誰なのです。

匹田 料理の皿洗ひをやつてゐたボーイなのです。どうして此の男が一人乗りおくれたかといふと、此の男は二三日前に船の中で人の物を盗んだのださうだ。それで此の男は物置のやうな一室に監禁されてゐたのです。ところが今船が暗礁に乗揚げて沈没するといふ時には誰だつてわれ勝ちに逃げようとするから、一人として此のボーイの事などを考へてゐたものはありやしない。船長自身さへも危く忘れるところだつたのだ。ふと下から、早くポートにお乗んなさいといはれた時に、始めて監禁したボーイのことを思ひ出したのです。そこで「忘れ物があるから一寸待つてくれ。」といつて、急いでボーイを救ひ出して來たのです。

有村 そして自分は船に残つて、船と共に沈んでしまつたのですか。

匹田 さうです。

有村 實に立派な人格者ですね。



匹田 船長なんてものは、船頭の親方みたいなものだが、偉い奴がゐたもんです。  
欽次郎 北海丸に限らず沈没なんて時は、いつも船長は立派な行爲をやりま  
すね。

有村 私たちから見ると、人のやれないことをやつた様に思へますが、船長自身  
にとつては、あれが自分のやる當り前のことだつたのでせう。

匹田 いや、その當り前のことがなか／＼やれないのだ。偉い人といふのは大  
きな爲事をやつた人ではない。爲すべきことを敢然として爲した人だ。  
有村 さうもいへますね。

匹田 (時計を出して見て)これは長話をしました。私は外へ廻らなくつちやなら  
ない。

欽次郎 お歸りでございますか。

匹田 御病人をお大事に。

有村 有難うございます。

匹田 中央の戸口から表へ去る。

欽次郎 (兄のところに進み寄る) 兄さん、やつつけませう。

有村 やつつけるとは。

欽次郎 仔蟹を混入することです。

電報配達夫 大きな聲で電報」と叫んで一通の電報をおいて行く。二人その聲に  
ちよつと驚く。有村電報を開いて見る。顔に不安の色が動く。

欽次郎 どこから來たのです。

有村 英國だ。(電報を弟に渡す)

欽次郎 (電報を見て) 急ぐから期日を違へないやうにつてんですね。

有村 さうだ。

欽次郎 兄さん。いよくやつつけるより外ないぢやありませんか。

有村 (無言首を垂れてゐる)

欽次郎 二十四萬罐を八十日でやつてしまふには、どうしたつて、日に三千宛製  
罐しなくちやなりませんからね。兄さんのやうに、これを使つちやいけ  
ないの、あれを入れちやいけないのと言つてゐたら、とてもその半分も出  
來やしませんよ。

有村 (無言)



欽次郎 少し品が落ちたつて期日さへ違へなかつたらいゝぢやありませんか。兄さん、もう考へてゐる時ぢやありませんよ。どん／＼運ばなくつちや。

有村 (敢然と立上り) よし、やらう。

欽次郎 さうですか。それでわたしも安心した。

有村 おい欽次郎、店の者を直ぐにアヲカイにやつてくれ。

欽次郎 何ですつて。

有村 もう爲方がない。いくら高くてもアヲカイの蟹を買ふより外はないぢやないか。約束した船の方はとても引取れる望がないんだから。

欽次郎 兄さん、それは正氣の沙汰ですか。

有村 何だつてそんなことをいふんだ。

欽次郎 そんなことをしたらこの家はどうなるんです。少し位の損なら忍べますが、兄さんのいふやうな事したら、この家は立つてはいきませんよ。わたしは契約に背いて悪い品を送ることは出来ないのだ。

欽次郎 併し家を破産させても關はないんですか。

有村 おい欽次郎、潔く討死しようぢやないか。今度のやうにかう周囲の事情

が悪くつちやどうにもしやうがない。併しこれつきりぢやない。まだ秋の漁期もある。來年もある。翌さう來年ねんもある。それまでにきつと恢復がつけられるから。

欽次郎 さう旨くいくもんですか。殊に兄さんのやうなやり口ぢや。

有村 わたしはお前によくいつてゐたぢやないか。ほんとうの商業は眞の説教、眞の戦闘と同じやうに、場合によつては自ら進んで死をも損失をも辭せないものでなくてはならないつて。さうだ。昨夜沈没した北海丸がいゝ例だ。おまへが若しあの船の船長だつたら、おまへはあの際どういふ處置をとる。

欽次郎 無論あの船長と同じやうにやります。

有村 此の有村の店は、今沈没しかけてゐる汽船ではないか。そして私とおまへとはその船長だ。

欽次郎 沈没する時は私は無論あの船長に劣らないつもりです。併しそれは最後の最後の瞬間の事です。今船はまだ沈没はしません。沈没しない前に死を急ぐのは無智な自殺者が死場所を探してゐるのと同じです。



有村 おまへは暗礁に乗揚げてゐても、まだ危険に氣がつかないのか。

欽次郎 船を沈めることは船長の務ではありません。船を浮かべ揚げる事が、船を進行させることが、船長の第一の務です。

有村 水が甲板を浸してゐても、おまへはまだそんなことをいつてゐるのか。

おまへは船長としての明察がない。船長としての資格がない。

欽次郎 或はさうかもしれない。併し沈める事はいつでも出来ます。わたしは是非浮かび揚せたいのです。船も助かり、船員も助かり、そして私も助かりたいのです。

有村 それは誰だつてさう思はないものはない。併し船が沈みかけてゐる時そんな蟲のいゝことをいつてゐたら、自分許りか凡てのものを失はなければならぬ。それこそ救ふべからざることが出来<sup>あた</sup>る。

欽次郎 いゝえ、確に助かります。たいそれには兄さんの頭さへ變つてくれればいゝんです。

奥で赤ん坊の泣聲がする。

欽次郎 あゝ、あの聲が聞えませんか。兄さん、あなたは子供を飢ゑさしても關

はないんですか。

有村 (無言。首を垂れる)

欽次郎 嫂<sup>はな</sup>さんは永いこと寝てゐる。それなのに、その病人の寝てゐる家をなくしてしまつても、あなたはいゝといふんですか。

有村 いや、家内のことは……

欽次郎 まあお聞きなさい。嫂さん許りぢやありません。妹にしたつてさうです。妹は上の學校に行きたいのですけれど、事情が事情だから、女學校だけで止めにして、家の手傳をしてゐるぢやありませんか。そして若い娘にも似合はず、襷掛でせつせと働いてゐるのは何の爲です。家を大事だと思つてゐるからぢやありませんか。又私だつてさうです。兄さんの前だが、私はうちの雇人より先に起きて、夜も遅く迄働いてゐます。嫁をといつてくれる人もありますが、もう少し、もう一辛抱、もうちつと家が樂になつてからと思ふものですから、未だに貫はないでゐるんです。誰にしたつて家を思はないものはありません。そして働いたお蔭には、漸く運が向きかけて來たんです。その今一息といふ所へ來て、兄さんのや



うなことを言出されては、私は働きがひがなくなつてしまひます。

有村 そりやおまへたちには本當に濟まない。

欽次郎 誰にしたつて、あゝ金が溜つて行く、今月はいくら残つた、來月はいくら儲かる、とさう思へばこそ働く氣にもなれるんです。損する爲ならわたしは働くことはもう御免です。

有村 おまへのいふことにも無理はない。併し商人の務は儲けるばかりが能ではない。そこをよく了解してくれなくつちや困る。

欽次郎 それで家族はどうするんです。

有村 たとへ子供が飢ゑてゐるとしても、不正な金でわたしは乳を吞ませたくない。契約をごまかした金で、家族のものを養ひたくない。正しいことをして貧乏するなら、爲方がないぢやないか。これは家族の者も、きつと我慢してくれるに違ない。

欽次郎 (稍興奮して) あなたは縁の遠い外國人の信用を落さない爲に、近い身内の者を滅ぼすのですか。家の者には飯を食はせなくつても、他人には見え張らうといふのですか。

有村 (これも興奮して) 見えなぞぢやない。また遠いとか近いとかの問題ではない。唯しなければならぬことをするだけのことだ。

欽次郎 破産はしなければならぬことではありません。しないやうにするのが正當です。

有村 (愈々激して) 極つたことだ。而もそれをせねばならぬ破目に陥つてゐるのではないか。さうするのが正しいことなら爲方がないぢやないか。

欽次郎 (烈しく) 破産しなくて濟むものを、わざ／＼破産するなんて、それが何で正しいのだ。肉親のものを痛めるのが何で正當だ。

有村 おまへはまだそんなことを言つてゐるのか。

欽次郎 兄さんこそ考へて下さい。

有村 考へ直さなければならぬのはおまへの方だ。

罐詰職工製造場から出て来る。

罐詰工 どうしたもんでせう、旦那。蒸釜が煮立つてゐるんですが。

有村 よろしい、今大蟹を取寄せるから、そんなことは心配しないでいゝ。

罐詰工 外から蟹が来るんですか。



有村 さうだ。おい、そちらに店の者がゐないか。直ぐにこゝへ来るやうに言  
つてくれ。

罐詰工 へえ、畏りました。(去る)

欽次郎 ちや兄さん、どうしてもやるんですか。

有村 外に手段がないぢやないか。

欽次郎 兄さん、どうかもう一度考へ直して下さい。

有村 もう考へ盡くしたことだ。これ以上考へる餘地はない。

欽次郎 (捨てばちに) こんなことになるんなら、賠償金を拂ふ方が餘つ程増しな

位だ。

有村 商人の本務は契約を守ることだ。品物を支給することだ。たゞそれだ  
けだ。損害金を出すことぢやない。「生命の冠」

### 最新女子國文 卷八 終

昭和二年九月二十三日印刷  
昭和二年九月二十八日發行  
昭和三年一月二十日訂正再版印刷  
昭和三年一月二十三日訂正再版發行

最新女子國文	
一	四拾貳錢
二	四拾貳錢
三	四拾參錢
四	四拾參錢
五	四拾壹錢



不許複製

著者 松村武雄  
 發行者 大葉久吉  
 發行所 東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地  
 印刷者兼 柏佐一郎  
 大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地

昭和三年一月十三日  
文部省檢定  
高等女子學校國語科用

發行所

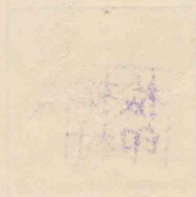
東京市日本橋區本銀町 (振替東京二八〇)  
大阪市西區阿波堀通四 (振替大阪四三)  
神戸市元町通五丁目 (振替大阪九五二)

寶文館



卷之四

續文編



續文編  
卷之四  
續文編  
續文編

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十
六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十
七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十
八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十
九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百



